
貴方のために (利知未シリーズ 番外1)

茅野 遼

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

貴方のために （利知未シリーズ 番外1）

【Nコード】

N0251E

【作者名】

茅野 遼

【あらすじ】

利知未シリーズの、最後に向けてのお話し、一つ目です。無事、国家資格試験を合格し、大病院で研修医生活を始めた利知未と、同棲を始めて一年経った倉真とのストーリー。時代背景は、1998年ごろとなります。（医療機関については判らない事だらけですので、その辺りはお手柔らかにご覧下さいませ。 > () <)

《同棲時代》

1

研修医一年・三月（前書き）

社会人となった利知未と、倉真の結婚までのストーリー、一つ目と
なります。更新は不定期となりますが、また、宜しくお願い致し
ます。

〈同棲時代〉

1

研修医一年・三月

同棲時代編

1 《研修医一年・三月》

—

三月十三日。 大学を卒業した十日後から、利知未は研修医として働き始めた。

外科病棟で改めて紹介をされ、挨拶を交わした。 これから暫くは、入院患者の処置などを主にして、五月か六月頃には、週一回で半日だけ、外来の患者も扱い始める事になるらしい。

改めて、医師として働き始める、その心は。 大きな不安と、少しの希望を秘めていた。

『裕兄が目指していたのとは、専門が違うけど……。 あたしには内科は、向かなそうだ』

インターン生活で、内科や小児科にも当然、携わって来た。 それを通して、そう感じた。

初日は、笹原と顔を合わせる事も無かった。 実習でお世話になってきた、ベテラン医師・塚田が、これから先の、利知未の相談役だ。 利知未の治療、処置についての、最終的な責任を、彼が負ってくれる事になる。

「先ず二年間は研修医として、焦らず、知識と技術と共に、心も磨きなさい」

始めにそう言われた。 確りと頷いて、これから宜しくお願い致しますと、最敬礼で挨拶を交わした。

最終的な責任と言っても、患者に対する中で、利知未の医師とし

ての責任も自身で負う事は当然だ。ただ、自分で判断しきれない時には、塚田医師に相談しながら、治療方針等を決めて行く事になる。

初出勤を終え、精神的にやや疲れて、夜、帰宅した倉真に甘えてしまった。身を寄せ合つて、心が落ち着く。

「早速、一人、患者さん、任せて貰った」

「いきなり、そうなるのか？」

「後、五日で退院出来る人だから。仕事に慣れる為にね」

「シフトは、どうなってるんだ？」

「三月一杯は、基本的には通常勤務。週一で夜勤もやるけど、普段は八時から十七時までだから、今までより家出るのが、三十分くらい早くなるな」

「ンじゃ、俺も七時起きに戻すか」

「いいよ？ 朝食は、作っておくし」

「お前の顔見ながら朝飯食った方が、一日の張り合いが出る」

「……あたしも、倉真の顔見ながら出勤した方が、元気出る」

寄り添って、いいムードになって、唇を重ねた。

「今日は、もう寝るか？」

「まだ、十時前だよ？ そう言う、気分なの？」

「そう言う気分だ」

「そうだね。片付けて、ベッド行こうか？」

頷いて、後片付けを済ませて、早々に寝室へ引っ込んだ。

準一は樹絵と付き合い始めてから、これからはナンパを止めようと、一応は決めていた。

改めて付き合い始めた日、樹絵に言われた言葉を思う。

「マジ、ナンパ禁止な」と、早々から釘を刺されていた。

それに、これまでやり続けて来た理由を考えても、今は取り敢えず、

しなくても済む筈だ。

けれど、習い性と言つのは恐ろしい。　つい街中で、隙がある女の子を目で探してしまう。

『自分から声掛けなけりゃ、ナンパじゃ無いよな？』
等と、都合の良い事を考えてしまう。

チャンスがあれば、一緒に遊びに行くコの一人や二人見つけても、良さそうだと考えてしまった。

樹絵は、準一の悪癖については完全に収まる物でも無いだろうと、始めから覚悟はしていた。　浮気の気配は、流石に敏感に感じ取る。　バイト先で仲良くしている別所に付き合つて貰つて、酒など飲みながら愚痴を溢す事も、シバシバあった。

金曜日の夜も、別所と共に居酒屋で飲んでいた。

「アーユー癡つて、直らないのかな。　男つて、皆そう言う所がある物なのか？　それともジユンが特別なのかな」

亨と付き合っていた頃には、感じた事の無い疑問ではある。

「おれは、よく判らないな。　少なくとも彼女が居る時には、ナンパはしなかったと思う」

元々、ナンパを趣味とするタイプでもない。

「別所つて、今まで何人くらいと付き合つたんだ？」

「そんな多くは無いけど。　取り敢えず高校の頃と、大学入ってから二人くらいだよ」

「長かった？」

「一年半と、一年弱。　今は、特に居ないけどね」

「そっか。　その間も浮気はしなかったんだ」

「浮気はしなかったつもりだよ。　……大学の彼女は、ちょっと焼き餅焼きなコだったからな。　疑われて振られたんだよ」

酒も入っている。　別所も歳の近い樹絵とは、気楽に話せる。

樹絵より一つ年下なのだから、今年で二十一歳だ。彼女が居た経
験を通して、いつかの利知未とアダム・マスターに対する疑惑は、
確信に変わっている。

それでも、今までの所は誰にも話してこなかった。ただ今夜は、
酒が過ぎてしまった。

樹絵の質問に答える為に、あの出来事をうっかり引用してしまった。

「けど、浮気するヤツは、するモンだと思う。あのマスターでさ
え、瀬川さんと怪しい頃が合ったモンな」

「何だよ？ それ！ 始めて聞いたぞ？」

ビツクリして、少し声が大きくなってしまった。

「そろそろ時効かな……？ おれがアダムでバイト始めた高校一年
の秋に、見ちゃったんだよな」

「何を？」

「財布を店に忘れて、朝、八時頃に取りに行った事があったんだ。

その時、休憩所で、二人が一寸、色っぽい感じで一緒に居た所を
見ちゃったんだ」

「四年半くらい、前になるのか。……って事は、その頃、利知未
は大学一年か？ ちょっと、信じられない気もする」

以前、準一から齎された情報を思い出した。

あの時、透子から聞いたと言って、準一が報告していた。利知
未は、高校一年の頃には、当時の彼氏と、すっかり大人の付き合い
をしていたらしい。
それでも大学時代の相手が、あのマスターと言うのなら、びっくり
だ。

「今は瀬川さんも、ちゃんと恋人が居るみたいだから。取り敢え
ず、時効だと思うけどね。……一寸、口滑らせたかな」

一応、反省もした。

「ま、時効って事で、イイのかな……？」

あの頃は、まだ倉真の事も、友人の儘だったと思う。

それから、準一の話をする気も失せてしまった。もう暫く雑談をしながら酒を飲み、十二時には店を出た。

帰宅した途端、秋絵が樹絵を捕まえた。

「樹絵！ 何処へ行っていたの？ ジュン君が救急車で運ばれたって！」

「何だよ？ それ！」

ビツクリした。続きを聞いて、一応は安心した。

「和尚が連絡くれたんだけど、盲腸らしいって。直ぐに手術してくれた見たいだから、もう平気だろうとは言っていたよ」

「何処の病院？」

「西区の西横浜医科大学第二病院。バイト中に腹痛で気を失ったらしくて、そこから運ばれたんだって」

「盲腸か。なら、明日か明後日でも、平気かな」

「呑気ね。良いの？」

「死ぬ事も、無いんじゃないか？ 大体、浮気するから罰が当たんだ」

「…言えるかも。また、ナンパ？」

「みたいだよ。良いよ、少しくらい痛い目見た方が」

さっさと風呂入って寝よう、と言いながら、階段を上がって部屋へ向かう。

秋絵は少し呆れ顔で、首を小さく竦め、後を追う様に階段へ向かった。

その夜、利知未は夜勤だった。

救急車で運ばれて来た準一は、直ぐに、オペをする事になった。

同じく、夜勤で入っていた笹原が、執刀する前に、利知未へ言う。

「虫垂炎でも、腹膜炎を併発している訳ではないみたいだな。瀬

川さん、僕がフオローするから、執刀して見るかい？」

「私が、ですか？」

「知り合いの様だし。大丈夫だよ、医師免許は当然、貰って来て
いるだろう？ 親の病院を手伝って、直ぐにメスを取る新人も居る
んだ。君に出来ない事は無いだろう」

言われて、挑戦する事にした。

『ジュン、悪いな。勉強させて貰うよ』

本来、友人の腹を開くのは、やはり抵抗がある物だ。それでも、
良いチャンスである事は変わらない。それに準一なら、大丈夫だ
ろうとも思う。

これが倉真だったりしたら、流石にイヤかもしれない。

オペは、無事に終わった。

「二、三日は、外科へ入院する。術後処置は君がするんだ。塚

田先生には、僕から連絡をして置くよ」

「ご迷惑を、掛けしたりしませんか？」

「どうして？」

「まだ、研修医として一週間も経っていない新人に、オペを任せて
しまった事です」

「オペは無事、成功だ。初めてにしては、かなり優秀だったと思
うよ」

「マダマダです」

「良いチャンスだったんだよ。これがもつと難しい症例だったら、
僕も君に任せたりはしまい。医師として判断した。この症例は、
新人の君でも無事に処置が可能だね」

「……ありがとうございます」

頭を下げて、礼を言った。

この件については、利知未にお咎めは無かった。笹原が確りフオローに回った事でもある為、軽く苦言を告げて収めてくれた。無事に終えた事でもある。

夜勤明け、朝七時半頃に帰宅した利知未は、倉真が自分で起きて朝飯の準備をしている光景を見る。

「おオ、お疲れ。朝飯、二人分作った」

「マジで？ サンキユ」

つい、昔ながらの言葉が出てくる。気を付けてはいるが、疲れた時などは、倉真の前では気が抜けてしまう。反省だ。

それでも嬉しいと感じて、キッチンへ立つ倉真の頬へ、感謝のキスをした。

「腹、減ってるか？」

「背中と、くっ付きそうだよ」

「ンじゃ、食おう」

「うん」

利知未も手伝って、テーブルの上へ、朝食を並べた。

朝食を済ませてからシャワーを浴び、洗濯を済ませてから仮眠を取った。夕方、買い物へ出掛けて、夕食は利知未が作った。

夕食の時間、昨夜、準一が運び込まれた事を報告した。

「盲腸だし、オペも無事終わったし、直ぐ退院出来るとは思っよ」

「そーか、ンじゃ、見舞いは行く必要、ネーな」

「良いんじゃないかな。けど、からかいに来てやれば？」

「笑わせてみるか？」

「それは、医者としては反対。……けど、ダチとしては賛成」

悪戯めいた利知未の言葉に、倉真は、軽く笑った。

その日は、夜勤明け休みだった。シフトでは、その翌日まで休める事になっていたが、準一の退院まで休みが減ってしまった。

「かなり特例に近いからね。責任は確り果たすように」
お咎めの代わりに、そう言われた。

それでも、まだ外来を担当している訳でもない。融通を利かせてくれた結果だ。

「とは言え、良い経験だからね。オペ後の経過まで、気を抜かずに確りと取り組むように」

塚田医師から言われて、利知未は素直に頷いた。

夜勤明けの翌日、八時からの通常勤務で出勤した。準一は、たった一日で、病棟内の有名人になっていた。

処置箇所の痛みは、痛み止めで誤魔化される。流石に夕方までは大人しくしていたらしい。翌日の土曜日に、見舞いへ来てくれた和泉に、トランプを買って来て貰った。

夕食後から、比較的、軽い症状の同室患者を集めて、トランプマジックを始めてしまった。中でも元気な患者が、別の病室から入院仲間まで呼び寄せてしまった。

その様子を見て、消灯時間の見回りに来た、ナースに怒られてしまった。

「昨日、手術したばかりで、安静にしていなくてどうするんですか?!」

二十代後半のナースだ。闊達なタイプで、大部屋患者達からは恐れられている。

「梅野女史だ。渡辺君、要注意」

『梅野女史』とナースを表現して、彼女と同じ年の患者が耳打ちした。

彼は高橋と言って、会社の運動部で足首の筋を痛めてしまった。暫くは安静が必要で、十日間から二週間の予定での入院だ。松葉杖をついている。ベッドは、準一の斜め向かいだ。

「キツそうだけど、美人ジャン？」

梅野女史が出て行ってから、再びベッド脇へ移動して来た高橋に、準一が感想を述べる。

「顔だけはな。同じ美人なら、俺は、研修医の瀬川先生の方が好みだ」

利知未の名前を聞いて、準一は目を丸くした。

「渡辺君が羨ましいよ。担当医、瀬川先生になってる」

ベッドの頭部分に掛けられた、患者の情報プレートを見て、高橋が言う。

「けど、研修医なんだから、実験台になっただって事だよ？」

その部分に異論がある訳ではない。利知未の事は昔から慕っている。

これも、助けられたって事になるんだよな？ と、考える。

『利知未さんは、昔からずっと、人助けの為に生きて来てる様な人なんだな』

と思った。ある意味、あの人らしいかもしれない。

そう言えば、病院での利知未の様子は、どんな何だろう？ と、考え、想像しながら、三十分後には大人しく眠った。

翌日、午前中に利知未が、準一の様子を見に来た。

ベッド周りのカーテンは開いたままだ。病院での『瀬川先生』の様子を、改めて観察できた。

利知未は笑顔で、準一に問い掛ける。

「調子はどう？」

語尾の印象が、今まで知っていた利知未の様子と、随分違う。

少し目を丸くして、その後もよく観察してみた。

「痛み止め効いている。セガワセンセイが、手術したんだよね？」

「オペは成功してますよ。一寸、傷口見せて下さいね」

利知未は立場上、柔らかい雰囲気を出しながら、少し照れ臭い感じもする。カーテンを閉めてから、軽く溜息をついた。

「やっぱ、肩凝るな。ジュン相手にこうしてるのは」 小声で呟いた。

準一は、その様子を見て表情だけで笑う。腹から笑うのは、流石に傷口に沁みる。

「普通、ナースがこういう処置、してくれる物かと思った」

「病棟の医師たちは、忙しいからね。それを助けて患者さんを労わるのは、ナースの仕事だけど。……あたしの場合は、まだ担当も少ないから。それと、今後の為に、だ」

最後の最後で、語尾が戻ってしまう。自分に反省だ。

「成る程」

高橋の意見を思い出して、納得した。

「何が？」

「何でもない」

準一は、恍けた表情で誤魔化した。

言葉使いや立ち居振る舞いに気をつける利知未の白衣姿は、中々、色っぽくも見えた。

問診をしながら手早く処置を済ませ、経過を見た。傷口は段階を経て、回復へ向かっている。後、2日もしたら、抜糸しても平気そうだと思う。

処置を終え、カーテンを開いた途端に、気分を切り替えた。

「じゃ、安静にされていて下さいね」

再び猫を被った女らしい笑顔を利用未に見せられて、準一は内心で大笑いしていた。

その日曜日、午後一で倉真が、準一をからかいに見舞いに現れた。「そっか、利知未さんと住んでるんだモンな。聞いてて当たり前前か」

倉真の姿を見て、準一が小声で呟いた。

「お前の所為で、折角の休みが台無しだぜ。ほら」

倉真は、青年誌を見舞いに持ってきた。

「サンキュー」

準一は雑誌を受け取って、顔だけで笑顔を見せた。

「まだ、屁、出ないのか？」

「一昨日、手術したばかりだよ？ そりゃ、無理だ」

「樹絵ちゃんは見舞いに来てくれないのか？」

「和尚が、連絡はしてくれてる筈だけどね。バイトもあるし」

「アダムで、バイトしてんだよな。俺は最近、行ってネーな」

「利知未さんが飯、作ってくれてるんだから、外食する必要、無いよね」

「そう言うことだ。午後の回診の前に、退散するとするか」

「内緒なのか？一緒に住んでる事」

「一応、な。ココでこうして話したら、内緒もクソもネーよな」

「ンじゃ、オレも気い付けないとな」

「お前は口が軽いからな。気を付けてやってくれよな。ジャー
な」

倉真は十分ほどで、準一の病室を出て行った。

廊下で利知未と擦れ違う。二人にだけ判る、アイ・コンタクトを交わした。

月曜日、樹絵はシフトで、バイトが休みだ。

『まだ、入院中だよな。……罰が当たったんだろうとは、思うけど。顔だけは、出してやろうかな』

下宿退去まで、二週間弱しかない。最近、引越し準備も忙しかった。

片付けを途中で止めて、着替えた。見舞いに4コマ漫画の単行本を数冊、バックへ入れた。

里沙の車を借りて、病院へ向かった。樹絵は最近、ミニスカートを良く履く様になっていた。スタイルも徐々に変化して来ている。

背は平均でも、見た目には中々、可愛い女に見えてきた。

病院へ到着して、外科病棟、3階へ上がった。

廊下の途中で、よく知った顔と、目立つ長身の白衣姿を見かけた。

「あれ？ ……利知未？ もしかして！」

聞こえてきた素っ頓狂な声に、利知未は振り向いた。

「樹絵？」

小走りして来る姿を見止めて、立ち止まる。

「やーぱり！ 利知未じゃん？ ……なんか、綺麗になった？」

「……サンキュ」

照れ臭いながらも、小さく礼を言う。改めて樹絵の全身を眺める。

「樹絵も、大人っぽくなったな。一瞬、誰だか判らなかつたよ」

出て来た言葉に、また反省だ。昔の様子に、自分が戻っている。

「お見舞い？」

言葉に気を付け直して、少しは女らしい微笑を浮かべる。

その利知未を見て、樹絵は何と無く、嬉しいような気もする。

「倉真の影響かな？」

思いながら、利知未の問い掛けに頷いた。

「そっか、ココだったんだよな。利知未の勤務先。まだ、春休みかと思った」

「春休みは、十日くらいはあったよ。先週から、仕事が始まっている」

「そうだったんだ。けど、始めに秋絵から病院名を聞いても、思い出せ無かったよ」

「健康優良児は、中々、顔を出さないからね。思い出さなくても仕方ない」

小さく笑顔を見せられて、樹絵も微笑して、軽く首を竦める。

「まーね。そうそう、四月から警察学校、入る事にしたんだ、あたし」

「そーなの？ 大学は？」

「辞めた。やりたい事、やっと見付かったから」

「そっか。ま、頑張れ」

樹絵の報告に、内心では驚いていた。それでも、夢を追い掛ける事には賛成だ。

アダム・マスターの姿勢は、利知未にもすっかり馴染んでいる。

「もー、引越しの準備とか、色々忙しいのに。ジュンのヤツ、行き成り盲腸だもんな。参っちゃうよ」

「上手く行ってるんだ。何より、何より」

「そっちこそ！ 倉真と同棲、始めてから、どれ位になるんだ？」

「今に、一年かな。……住所、知らせてあったんだ」
チラリと思う。友人として仲が良かったのだから、倉真から引越しの報告があっても、当たり前ではある。自分からも連絡はしてある。

「病院では、一部の人間しか知らない事だから、よろしく」

人差し指を唇に当て、小声で付け足した。

「あ、ごめん。秘密だったんだ」

樹絵が慌てて、周りをキョロキョロと見回した。外見は随分、大人びて来た樹絵の、昔から変わらない様子に小さく笑ってしまう。

回診の準備を整えたナースが、利知未に軽く目配せをして、横を過ぎる。

ナースが行き過ぎてから、話を切り替えて、樹絵が言う。

「引越す前に、一度あの家に来てよ。ゆっくり話がしたいから別所から先週、聞いた話を、軽く突っ込んで見たいと思う。」

「良いよ。何時、引越し？」

「四月一日。学校、三日から始まるから」

「そっか、警察学校の寮。……そうすると、中々、会えなくなるんじゃない？」

準一と会えなくなるのではないかと、そう思う。

自分が、インターン一年の頃を思い出して、可哀想な気がした。

「まあ、仕方がないよ。アイツもそろそろ、真面目に仕事、始めるって言ってたし。あたしが警官になると、どっちが先か、競争になる予定」

屈託無い笑顔を見せる。

「あたしも、大学時代は同じ事、言っていたよな」

仕方がない。そう割り切って頑張ってきたが、結局、不安に襲われて、同棲生活へと踏み込んだ。

『樹絵の方が、恋愛については、遅しいかもな』

あの頃の自分と、同じ思いを抱えてしまわなければ、一番良いことだとは思っ。

昔からよく知っている樹絵を思い出す限り、自分よりは余程、遅しい精神の持ち主だとは、思っている。

「判った。今月一杯は、土曜夜勤明けの日曜休みだから、週末には行けると思うよ」

大部屋から、ナースが顔を覗かせていた。気付いて、利知未が言う。

「ごめん、あたしは仕事があるから。ゆっくりお見舞い、してあげて」

「あ、そーだよな。こっちこそ、ごめん」

「まだ腹筋、使わせない様にね」

「分つかりましたあ！ 瀬川センセイ！」

警官風の敬礼を見せて、樹絵が無邪気に笑ってみせる。

「じゃ、ね」

済みません、とナースに詫びて、大部屋へ入った。

一人で担当している患者は、準一を含めても、まだ2、3人だ。

今日は、塚田医師に指示された通り、ナースと共に、彼の患者を数人、診て回る。

割り当てられた患者は、もう直ぐ退院出来る患者が殆どだ。

塚田は、本日夜勤だった。笹原も、自分の担当患者以外の何人かを、塚田から預かっている。

この病院の外科は、勤務時間のずれを、そうやって持ち回っていた。

大部屋を回り、患者に声を掛けられる。

「美人な先生が入ったな」

「また、そう言うことばかり言って」

ナースが、苦笑いしながら呟いた。

「塚田先生は、今日は休み何ですか？」

「今日は夜勤です」

返事をして、患部を改める。

「もう、すっかり良くなっていると、仰ってましたよ。確かに、もう直ぐ、退院出来る筈ですね」

勉強もある。ベテラン医師の処置後を、確りと観察させてもらった。

『綺麗な傷跡だな』

そう、感心してしまった。処置の能力差かもしれない。

『ジユンの患部は、どうなるんだろう……？』

自分の処置を、チラリと思い出した。

塚田医師から預かり分の回診を終え、自分の患者へ回った。

樹絵は、準一の病室を訪ねた。比較的、軽い患者が多い所為か、ベッドが殆ど空いている。回診の後、リハビリや談話室や、喫煙所へと消えている。

カーテンの脇から顔を覗かせて、樹絵が声を掛ける。

「よ。まだ、お腹痛い？」

「お、来てくれたん？ 流石にね、動くはまだ、少し痛いよ」

「はい、お見舞い」

樹絵から、4コマ漫画の単行本4冊を渡され、準一が言う。

「うわ、有り難メーカーな見舞い、持って来たな。笑うと腹、痛じゃん」

「だけど、暗い本、持って来たら、気が滅入るだろーと思って」

悪戯心が半分だ。樹絵は、にやりと笑って見せた。

「そりゃ、そーだ」

「だいたい、金ケチるから入院が長引いたんじゃない。今は、一日か二日で退院出来る手術も、あるんじゃないか？」

まだ、小学生のころ。両親と共に北海道で生活していた頃だ。今はアメリカに居る由香子が、どうしても見たいテレビアニメがあり、腹痛を訴えずに、盲腸から腹膜炎を併発しかけた事がある。幼馴染の樹絵と秋絵も、見舞いに行った記憶があった。中学か

ら双子は、この神奈川へ越して来たのだから、恐らく小学三年生か四年生の頃だ。

あの頃は、昔ながらの手術法しか、無かった筈だ。

「シャー無いよ、余分な金、ねーもん」

へーリと、準一が言う。

「貯め込んでいた筈だよな？　なんに使う気なんだ？」

「内緒」

「ま、いーけど。あたしも今は忙しいんだからさ、こーして来てやっただけでも、有り難がっでもらわなきゃ」

「感謝感激。流石、我が愛しのラバー」

「何処まで本気なんだか……」

何処までもふざけた準一の調子に、樹絵が呆れて突っ込んだ。

準一は早速、単行本を開いていた。

「あ、これ、樹絵が好きな少女マンガの4コマだな」

「そう。頭使わなくていいし、面白いよ。退院したら返してよね」

「漫画とか、どうするんだ？　持ってくるのか？」

「持ってけ無いよな。売るか、実家に送るかだよ」

「どうしても、取って置きたいのあったら、オレが預かっつくよ？」

寮、出るまで」

「その間、読んでる？」

「偶には、借りるかもね」

「そーだな。じゃ、厳選しておこう」

準一も面白がりそうなモノを、幾つか預けておこうかと考えた。

「担当、利知未なんだ！」

改めて、ベッドへ掛かった患者の名前と、担当医、入院日、手術日
が書かれた、プレートを見た。

「そう。実験台にされちゃったよ。どーしよー？　大事な所を見られたかもしれない」

「何時も、倉真の見てんじゃないか。……比べられてたりして」
真つ昏間から、下ネタチックになってしまう。準一から一番離れた窓際のベッドには、患者が一人、足の爪を切っている。

チラリとこちらを見られた気がして、樹絵は少し赤くなる。

「オレ、もーお嬢に行けないよ」

少し、オーバーアクションを見せて、いててて、と、腹を押さえる。

「バーカ」

「テテテ……冷たいなあ」

「くだらない事、言ってるからだよ。……剃られたんだよね、ど

ーなってるんだろっ?」

一寸だけ、興味を持ってしまった。

そのまま、ふざけた会話で遊んでいると、利知未が病室へ入って来た。

「何、じゃれ合ってたの? 回診です。先に、藤堂さん診て来る

から、少し待っていて下さいね」

「ふぁーい」

準一の気の抜けた返事を聞いて、小さく笑ってしまった。

利知未はナース無しで、一人で現れた。窓際のベッドへ向かう。

問診をしながら、手早く処置を済ませた。

「退院、予定通りになりますか?」

藤堂から問われ、少し考える。

「そうですね、この調子なら、少し早めに退院できると思いますよ。検討して見ます」

「お願いします」

処置を終え、準一のベッドへ回る。藤堂は、トイレへ行った。

利知未の様子を、樹絵も興味深く眺めていた。カーテンを閉め

て、患部を診る。気が少し抜けてしまう。

「明日には、抜糸出来そうだな。順調、順調」
言葉と態度が、昔ながらに戻ってしまった。

「直ぐに、退院出来ると思うよ。ガスは出た？」

「まだです」

「そっか。お前、痛みで朦朧としながら、『なるべく安くお願い
します』って、繰り返してたぞ？ 覚えてるか」

「覚えてるよ。だって、本当に金、ねーんだもんな。シャーな
いよ」

「保険、使えば安くなるんじゃないか？」

樹絵の言葉に、準一が言う。

「取り敢えず、出して置く金がないんだ。保険使っても、手術し
たらかなり出るし。実家、出る予定だからね」

ついでのように、報告をする。行き成りの報告に、樹絵は少し呆
然とした。

「そーなんだ。知らなかった」

「女、連れ込み難しいもんな、実家じゃ。特に、これから月に一度
くらいしか、会えなくなりそうじゃ、焦るよな？」

利知未が、すっかり普通の調子で、ニヤリと笑って見せた。

「……あたしの、ため？」

準一が、照れ臭そうに笑いながら言う。

「寮に入って休みの時さ、北海道の実家に帰る事、無いだろ？ オ
レが一人暮らししてれば、そっち泊った方が楽じゃん？」

「そー言う事らしいぞ」

利知未も笑顔だ。やっぱりな、と、思う。

「……嘘」

「ま、そー言う事」

樹絵の呟きに、準一が言って、寝返りを打って向こうを向いてし
まう。

「……イテ！」

身体を動かしたついでに、回復の音がした。

「あ、出たな」

「…格好悪」

「おめでとう。明日、抜糸したら、退院して良いぞ。入院が長引くとベッド代も嵩むからな。痛み止めは、三日分くらい出してやるよ」

「どーも」

「じゃ、何か有ったら、ナースコールしろよ？」

ニコリと笑って、カーテンを開いて出て行った。樹絵が慌てて追いかける。

「瀬川先生！ ……有難うございました」

「どーいたしました」

カーテンの外で、利知未は女らしい様子に戻っていた。

利知未が病室を出て、暫くすると、高橋がリハビリから戻る。

「彼女か？」

樹絵を見て、少し目を丸くした。

「可愛い子だな。渡辺君は、面食いだっただんな」

そんな風に褒められたのは、樹絵は初めての経験だった。赤くなってしまう。その様子を見て、高橋が準一をからかう。

「高橋さん、オレ、明日の午後には退院できるってさ」

「回診、回って来たのか？ リハビリの時間、ずらして貰えばよかつたな」

その言葉に、準一が笑顔で、樹絵に説明した。

「瀬川先生の、ファン」

「そーなんだ。判る気もする」

利知未の、昔よりも女らしい雰囲気を出す。

「美人だよな。俺は渡辺君が羨ましいよ。担当、替わってくれないかな」

「高橋さん？ の担当は、笹原先生って言うのか」

「外科の若先生だよ。腕は良いみたいだ」

「ナースの人気者だよな」

「みたいだな。……ココだけの話し、俺は、あの気障臭い感じが気に入らないよ」

「そんな先生なの？」

「まだ独身で、顔もまあまあ良くって、腕も良い。将来有望って、事らしいよ」

「ジユン、何処からそんな情報、貰ってくるんだ？」

「勿論、ナースのお姉さま達から」

「……まさか、病院でナンパなんか、してないよな？」

「お、読まれてるな」

「あ、シー！」

高橋の言葉に、準一は慌てて、人差し指を立てる。

「今更、遅い！」

樹絵は準一の頭を、軽く小突いてやった。仲の良い二人の様子を見て、高橋も笑っていた。

外科の医師は、利知未の他に四人居る。塚田医師と、一人は妻帯者だ。もう一人は、利知未よりも四年ほど先輩で、彼には結婚を考えている恋人が居る。目立って腕が良いという訳でもないが、スポーツトレーナーの資格も持っている関係で、そちらの方面には強い。何人かのアスリートの、掛かり付け医に成っている。自然、ナースの注目は、笹原に集まり易い。

今の所、利知未に対して、目立ったアプローチもしてはいなかった。まだ働き始めて一週間だ。時間が合う事が、あの日、夜勤以外では無かった。

翌日、午前中に、準一の抜糸が終わる。昼まで病院食の世話に

なり、午後の早い時間に退院して行った。
利知未は忙しくしていて、準一の退院の見送りもする暇が無かつた。

午後三時を過ぎてから、一仕事終え、ナースステーションに顔を出すと、準一からの手紙を渡された。

お世話になりました。週末、オレも行きます。久し振りに酒でも飲みましょう。PS / 白衣姿の利知未さん、中々、そそられましたよ！ 倉真に飽きたら、是非お相手願います？！

と、書いてあった。軽く吹き出してしまう。

『何のお相手だよ？』

くすくす笑っている利知未を見て、ナースが言う。

「瀬川先生のお知り合いだったんですね。面白い子だったわ」

「ご迷惑、お掛けいたしました」

利知未は改めて頭を下げた。

「そうそう、塚田先生から、支持を預かっていました」

「何ですか？」

「藤堂さんの退院予定、三日ほど早めても良いそうですよ」

「有難うございます」

早速、藤堂へ知らせに行った。

帰宅して、晩酌の時間に、準一からの手紙を倉真に見せてやった。
「アイツ、ふざけた事、書いてんな」
倉真は呆れ顔で、そう言っていた。

三

その週の土曜日、利知未は夜勤明けの仮眠を取り、午後二時頃に

は、懐かしい下宿の前に居た。その日、倉真は仕事だった。
「変わってないな」 つい、小さく呟いた。 当たり前だと、思
い直す。

利知未がこの下宿を出てから、二年の月日が経とうとしている。

最初の半年程は、一人暮らしの寂しさを紛らわす為、それでも偶
には遊びに来ていた。

倉真と生活を始めてからは、暇も無かったが、寂しいと感じるこ
と自体が少なくなっていた。 今日、およそ一年半振りの来訪だ。

チャイムを鳴らして暫く待つと、中からスリッパのパタパタと言
う音が聞こえて来た。 玄関を開けて、樹絵が顔を出す。

「よ、遅くなつた」

ライダージャケットを羽織り、昔ながらの雰囲気が見れる。

「まだ二時前じゃん。 ヘーキ、ヘーキ。 上がつてよ」

樹絵が、来客用のスリッパを出してくれた。 何と無く変な感じだ。

「バイト、今日は休みなのか？」

「引越しが近いから。 昨日までで、一応は終わりだった」

「そうか。 マスター、元気か？」

「元気だよ。 今年に入ってから、あの人の変りに昼間のカウンタ
ーへ入ってたよ。 大体、別所と一緒にだったけど」

「まだ、あの癖、直らないんだな」

「直らないだろ？ 普通」

話して、笑いながら、リビングへ通った。

樹絵が出してくれた珈琲を飲んで、感心した。

「美味しい珈琲、淹れられるようになったんだな」

「あの人、厳しいよな。 殆ど毎日、勉強して、二ヶ月掛かったよ」

「二ヶ月なら、優秀じゃないか」

「週二日で、三ヶ月の利知未が、一番優秀だったらしいじゃん」

「日数で言ったら、そうなるのか？　けど、好きな事を覚えるのは、苦にはならないよな」

「珈琲が好きって、事か？」

「そうだな。　その代わり、紅茶は時間掛かったよ」

樹絵は、タイミングを計っている。　…いつ、あの話を、突っ込んでみようか…？　利知未が、話を再開する。

「今日は、朝美が仕事か。　里沙は？」

「今、チョット出てるよ。　直ぐ帰ってくるって言ってた」

「そうか。　皆、元気か？」

「冴吏は、あたしより一日前に退去予定。　最近、新しい部屋と往復してる」

「もう、そんな歳だよな。　樹絵より一つ上なんだから」

「うん。　美加は、アルバイト始めた。　秋絵は相変わらず」

「皆、出掛けるのか」

「秋絵は今日、撮影だよ。　最近、エキストラ出演する事が増えた見たいだ。　見せて貰ったんだけど、変な感じだよな。　自分と同じ顔が画面に居るって」

「だろうな」

「で、今、あたしたちが昔、使っていた部屋、中学生の姉妹が使ってる」

「下宿は、まだ続けるつもりなんだな」

「みたいだよ。　また、これから増えるのかは、知らないけどね」

「そっか…懐かしいよ。　このリビングも。　後で、部屋見せてくれないか？」

「いいよ。　利知未が使っていた頃と殆ど変わらないよ。　今、引越し準備で少しバタバタしてるけど」

利知未がウエストポーチから、タバコを取り出した。　それを見て樹絵が、灰皿を出して来てくれた。　空気洗浄機もスイッチを入れる。

「気が利くようになったじゃないか」

「マスターに仕込まれた。珈琲の淹れ方だけじゃなくて、言葉使いや、他にも色々なことを仕込まれたよ。マジ、厳しーんだよな」
「けど、良く面倒、見てくれるだろう？ あのヒトは」
「余り良く、面倒見て貰い過ぎないように、気をつけていたりして……？」

「何だ？ その含み笑い」

「別に。ただ、チョットね。……聞いてちゃったからな」

その言い回しと表情に、利知未はピンと来た。

「……知ってしまった訳だ」

「先輩アルバイトから」

別所か？ と思う。あの朝の疑惑は余程、根強く彼の心に引っ掛かっていたのかも知れない。

「ま、仕方ないか。……倉真には、内緒ね」

昔の雰囲気で話していた利知未の様子が、一気に女っぽくなってしまう。

「二人とも、酒、かなり飲むからな」

「利知未は高校時代から、アダムでも1、2を争う酒豪だったって」

「酒の勢いって、ヤツ。……けど、そんな何回もって訳じゃ、ないよ」

「でなきゃ、大変じゃん。だって、不倫って事だろ？」

「それを言うか。ま、そう言うことになるよな。……普段は、

男同士みたいだったから。多分、マスターは不思議がってると思うけどね」

自分からの想いは、本気だった。あのヒトは優し過ぎただけだと、今は思っている。それでも、あの時のことを思い出して、雰囲気がますます女っぽくなってしまふ。

玄関から物音がした。樹絵がソファから立った。

「里沙かな？」

リビングから顔を出し、廊下を歩いてくる里沙を見止めて、声を掛けた。

「お帰り。 利知未、来てるよ」

「その様ね。 バイクが止まっていたから」

「里沙も珈琲、飲む？」

「折角、利知未と久し振りに会えるのだから、一杯だけ戴こうかしら」

「OK、準備するよ」

「お願いね。 荷物だけ、置いてくるわ」

里沙はスリッパの音を響かせて、仕事部屋へと向かって行った。

部屋へ荷物を置き、里沙がリビングへ入る。 樹絵が珈琲を運んで来た。

「利知未も、お代わりいる？」

珈琲メーカーのポット毎、持ち込んで来た。 利知未は残りの珈琲を飲み干して、お代わりを注いで貰った。

「樹絵も美味しい珈琲、淹れられるようになったでしょう？」

「そうだな。 お得意様の、珈琲党のクライアントは樹絵の担当か？」

「そうよ、お陰で助かってるわ。 次は、秋絵にでも覚えて来て貰おうかしら？」

微笑しながら、里沙が言う。

利知未も十年間、世話を掛けて来た相手だ。 高校時代の友人と久し振りに会っても、過ぎた時間を感じない事がある。 丁度、里沙と利知未は、そんな感じだった。

「久し振りなのに、久し振りって感じがしないよな」

「そうね。 けど随分、綺麗になったじゃない？」

「里沙も三十三歳とは思えないほど、若々しいよな」

「素敵な旦那様が居て、遣り甲斐のある仕事があるんだもの。 老け込んでなんか居られないでしょう？」

「成る程。どっちも充実してるって事だ」

「そうね」

「子供は、まだ作らないのか？」

「今、チョット仕事を抱え込み過ぎているのよ。これが一段楽したら、考えるつもりよ」

「どっちにしる、高齢出産だ。子育て、大変そうだな」

「姪っ子・真澄の、ヤンチャ振りを思い出した」

「利知未は、どんなつもりで居るの？」

「……それって、結婚、出産の事か？」

「もう、社会人でしょう？ ステディな相手が居て、一緒に住んでいるんだもの。考えない事は、無いんじゃないの？」

里沙に突っ込まれて、利知未は始めて、今の自分の夢を短く語った

「……そうだね。考えてない事は、ないけど」

樹絵も、黙って珈琲を飲みながら、聞いてみた。

「あたしは、……昔、里沙に言われたけど。自分の、理想の母親を目指してみたいと思ってるよ」

「それって、結婚したら、医者は辞めるって事か？」

「…そうなるかな？ けど、金は必要だから、直ぐって訳には行かないな」

「何年計画？」

「それは、一人じゃ決められない」

「ふーん」

感心したような樹絵の声に、気恥ずかしくなってしまった。

「取り敢えず、今の夢は、……いい家庭、何時か作れたら良いなって、思ってる」

「そう。随分、成長したもね」

里沙が言って、満足そうな笑みを浮かべた。

『ってことは、倉真とは結婚まで、真面目に考えてるって事か』

樹絵は、声には出さずに、自分で勝手に納得した。

それから暫く、三人で雑談をしていた。二十分程そうして過ぎてから、里沙が珈琲を飲み切つて、ソファを立つ。

「じゃ、また、遊びに来てね。今度は、私もゆっくり出来る時に分かった。朝美にも会いたかったな」

「仕事だからね、仕方ないよ。そろそろ、あたしの部屋、行く？」

「そうしようか」

「ごゆっくりね」

里沙がキッチン側から、リビングを出た。利知未は二杯目の珈琲を飲み干して、ソファを立った。

樹絵の部屋へ足を踏み込むと、利知未は、懐かしい思いに捕らわれた。

「カーテン、そのままなんだ。……懐かしい」

一歩踏み出して、暫し呆然としてしまう。

「ベッドの位置も、そのままだよ」

「本当だ。変えても良かったのに」

「あたしも、利知未が居た頃の部屋が、好きだったんだ」

「そっか。……ありがとう」

「何が？」

「何と無く」

軽く樹絵を振り向いて、微笑を浮かべる。そのまま、机に向かって歩く。

「……十年、居たんだもんな。ここに」

机を指で辿って、懐かしい表情になる。

「あたしが、この下宿に入居してからも九年経つよ。利知未と一緒に居たのは、二年前までだから……七年かあ。結構、長い付き合いだっただよな」

「本当だな」

さつき、先の夢を語っていた時には、女らしくなつた利知未の雰

困気が、今は、二年前まで、この下宿に暮らしていた頃の雰囲気に、戻っている。

暫く沈黙の中に居た。ふと現実に気が戻り、樹絵に問い掛ける。「ジューンとは、何時頃から、そーなつたんだ？」

樹絵を振り向いて、再び女らしい微笑を見せた。

「……付き合い始めたのは、半年くらい前」

「それで？」

「それでつて？ ……つて、そつちの事、言ってるのか」

赤くなつてしまう。その樹絵を見て、利知未がくすりと笑う。

「服のサイズ、変わったんじゃないかと思つて」

自分が覚え始めてしまった頃と、倉真と生活をするようになってから、サイズが少し変わつて来た事を思う。

「定期的に、そう言うことしていると、微妙に変化して来るもの何だよね」

意味ありげに笑つた。赤くなつたまま、樹絵が言う。

「……そーなつたのは、五ヶ月くらい前だよ」

「成る程」

「確かに、洋服のサイズ、チョット変わつてきちゃつたよ」

「だろうね。 樹絵も、あたしの昔に、そっくりな体系してたもんな」

腕を組んで、現在の樹絵の姿を改めて眺めてやつた。

「興味あるな。あたしのミニチュアと言われていた樹絵が、どんな恋愛をして来たのか……？ あたしの過去は、知ってしまった訳だし」

「情報交換か？ 仕方ないな。フェアじゃ無いもんね」

改めて、樹絵がベッドの端へ腰掛ける。利知未は、机の椅子を

引き出した。

「灰皿、ある？」

「あるよ、朝美用のが。 待つてて」

腕を伸ばして、机の引き出しから小さな灰皿を取り出した。
それから、樹絵から大学時代の恋愛話を、始めて聞かせてもらった。

「ジユンが初めてって訳じゃ、無かった訳だ」

「そりゃ、一応ね。二年くらい、付き合ってたヤツがいたから」

「そっか。……色々、勉強して来たんだな」

「かなり、色々と教わって来たよ。今は、元彼二人には感謝してる」

「イイ事だ」

「な、利知未は、マスターと倉真の他には、居なかったのか？」

「そんな筈は無いと、判っていながら突っ込んでみた。」

「情報、持つてるんじゃないの？」

利知未に見透かされて、樹絵は小さく舌を出す。

「少しだけね。昔の彼氏は、某有名バンドの、現メンバーだとか」

「ジユンか？ それバラしたの」

「ま、良いじゃん。で、本当の所は、どうなんだ？」

「後でジユンのヤツ、苛めてやらないとな。……そうだな。あ

たしの恋人は、倉真で二人目だよ」

「じゃ、マスターと、その元彼と、倉真の三人って事か」

「…そんな所」

視線を外して、肯定した。……哲は、彼氏とは言えない関係だった。

二人で、過去の恋愛暴露話が、盛り上がってしまった。ノックの音がして、里沙の声がした。時計を見ると、午後五時を回っている。

「利知未、ご飯、食べて行くでしょう？」

「もう、準備始める時間だな。手伝うか？」

「そうしよう」

「手伝うよ」

「そう？　じゃ、お願いしてしまおうかしら」

里沙の返事を聞いて、二人でキッチンへと降りて行った。

七時には、居酒屋へ行っている事になっていた。それ以降の連絡は、店に入る約束だ。準一と倉真とは、そこで待ち合わせをしていた。

三人で夕食の準備を手早く済ませ、里沙とも久し振りの食卓を囲んだ。

「樹絵、少しは料理、出来る様になったんだな」

「レシピ通りになら、作れるようになったよ。里沙先生のお陰で」

「ただ、分量とか、味付けの融通が利かない所が、玉に瑕ね」

里沙の言葉に、樹絵が軽く膨れた。

「でも、頑張ったんだからな。お嫁に行っても、困らない程度には成れたと思うよ」

「そうだな。良く頑張ったと思うよ。始めて樹絵に教えた時に

は、一体どうなる事かと思っただけだな」

利知未にもからかわれて、樹絵は益々、膨れてしまった。

二人が、六時半ごろに下宿を出ると入れ違いに、冴吏が帰宅した。

軽く言葉を交わして、情報を貰った。

「今年の五月に短編集、出せる事になったよ」

「そうか！　おめでとう。あたしは、余り読書とかしてる暇もないからな。その内、時間が出来たら読ませてもらうよ」

「お楽しみに。もう、帰るの？」

「これから飲みに行くからね。ジュンと倉真が、後で来るんだ」
冴吏の質問に樹絵が答えながら、玄関へ向かう。

「ダブルデートって事だ。じゃ、新しい住所、また連絡するね」

「待つてるよ。あたしの住所は、判ってるんだよな？」

「勿論。彼氏と同棲中でしょ」

「…そりゃ、ばれてるか」

「じゃ、元気でね」

「冴吏もな」

一足先に靴を履いていた樹絵に呼ばれて、玄関を出た。

徒歩三十分ほどの距離だ。昔、良く倉真と二人で入っていた居酒屋だった。あの頃は、綾子の事についての、相談ばかりだった事を思い出す。

到着した店の前で、利知未が呟いた。

「樹絵と居酒屋へ来る日が、来ようとはなあ……」

「そー言えば、初めてだったよね。下宿では、何度か晩酌してたけど」

「未成年の癖に、お前も良く飲んでたよな」

「利知未に言われる事じゃ無いよな。入ろう」

「…ま、そーだけど」

首を竦めて、店内へ踏み込んだ。

座敷席へ通されて、落ち着いた。始めに生ビールを頼んで、飲みながら二人を待つことにした。

樹絵とは一年半も会わなかった。その間の話をしていれば、二人を待つ時間も退屈はしなかった。

席へ着き、ジャケットを脱いだ。それでも暖房が暑くて、利知未はシャツのボタンを三つ程外した。中には夏のTシャツを着ている。

「まだ、三月じゃん。何で、半袖？」

「下宿までは、バイクで来たからね。エンジンの上に体、倒す形になるから。運転中は結構、暑いんだよ」

「そうなんだ。あたしも取るのかな、二輪」

「樹絵は、車だけ？」

「そう。しかも、学校辞めてから、合宿で取った」

「その方が早いもんな。あたしも、普通車は合宿で取ったからね」

「そーだったよな。合宿も、アレはアレで、楽しかったよ」

「普段と違う生活、出来るからね。あたしも免許合宿でバイク仲間、見つけたんだ。そー言えば、あの時の約束、果たさなかったな」

「約束？」

「その時、知り合ったバイク仲間と、その内ツーリング行こうって、言っていたんだけどな。……大学入ったら、忙しくて連絡もしなかったよ」

「そうなんだ。あたしは免許取って直ぐ、ジュンの車でドライブに行った」

「何処まで行ったの？」

「朝美に勧められて、埼玉の城峰公園まで」

「成る程。……それで、朝帰りだったんだ」

「……何で、判った？」

「ビックリした樹絵の顔を見て、利知未が笑う。

「下宿で、樹絵とジュンの話を聞いてたからね。そう思っただけ」

「……利知未って、意外と鋭いのか？」

「さあ？ そー言う訳でも、ないと思うよ」

「手持ち無沙汰になった頃、注文してあった中生が、突き出しと共に運ばれて来た。二人で乾杯をして、話を続けた。

「それから、利知未は丁度、樹絵が免許を取った頃の話をし始めた。去年の十月頃って言うと、倉真と三崎マグロ、食べに行った頃だな」

「ツーリング？」

「そう。その時、面白い事があったな」
利知未は、去年十月、観音崎での出来事を話して聞かせた。

話が終わる頃には、ビールが半分になっていた。泡も、すっかりなくなってしまった。

「そいつら馬鹿だな！ よりにも寄って、利知未と倉真の喧嘩最強カップルに絡むとは。怖いもの知らず」

「あの辺りにまで、噂は届かないだろ、普通」

「けど、雰囲気やバそうだとか、思わなかったのか？ 利知未はともかく、倉真って、見た目に怖そうじゃん！」

「それだけ、あたしが猫被っていたって、事になるんじゃない？」
声を上げ、笑いながら、利知未が言った。

昔の赤毛モヒカンを辞めても、短気そうに眉尻がキュツと上がった、一重瞼、釣り目顔の倉真は、十分、怖い顔と言えるかもしれない。もう少し目が細かったら、どこぞのチンピラに間違われても、不思議ではない。

「今に、倉真たち来るよね。楽しみー！」

壁掛けの時計を見て、樹絵がワクワクした顔をしている。

「何が？」

「利知未が、どれくらい変わったのか、目の当たりに出来そうじゃないん」

「セーカク、悪いな。多分、大して変わらないよ」

ビールを飲んで、誤魔化した。

倉真と二人きりで居る時の、自分の態度の違いは、言われるまでも無く把握しているつもりだ。……あの様子が出て来たら、恥ずかしいかもしれない。

約束の時間は七時半だった。十五分ほど過ぎて、準一が現れた。

「やつほー、遅くなって、ごめん」

何時も通り呑気に声を掛けて、樹絵の隣へ腰を下ろす。直ぐに

注文を取りに来た店員に、メニューを指して、適当にオーダーした。

「後は、倉真が来てからで良いか」

「良いと思う。チョット、遅いな」

時計を見て、利知未が呟いた。

倉真の土曜出勤は、残業があつたとしても、何時も大体、七時には終わっていた。アパートへの帰宅は、遅くても七時十分頃だ。

職場からココまでは、三十分の距離の筈だった。

「仕事、忙しいのかな」

利知未が心配そうに呟いて、もう一口、ビールに口を付ける。

「この前は、お世話になりました」

準一に言われて、目を丸くする。

「一応、挨拶くらいは出来るようになったんだ」

準一から『お世話になりました』と、言われる日が来るとは、考えた事も無かった。

「どーゆー意味だ？」

「言葉通り、じゃないか？」

恍けた反応も相変わらずだ。樹絵が突っ込んで、夫婦漫才のようになる。

「相変わらずだよな。入院中は世間話する時間も、余り無かったけど」

「もうすっかり、痛みも無いよ」

「そりゃ、良かった。初オペだったからな、少し気になってた」

「それよりもオレ、この前から聞きたい事があつたんだ。利知未さん、何時から化粧するようになったんだ？」

行き成り言われて、赤くなる。

「……化粧って、程の事はしてないけど」

「ジュン、そー言う事だけは、目聡いよな」

樹絵が突っ込んで、利知未は、照れ臭い表情のまま答えた。

「ファンデーション何かは、殆ど使わないし。日焼け止めと口紅くらいだよ」

「眉も、弄ってる？」

「整えてるくらいだよ。……って言うか、何でそー言うこと、目聡く見つけるんだ？ 倉真は、何にも言わないけどな」

「照れてるんじゃないのか？ 樹絵も化粧すればイーじゃん、利知未さんでさえ気を使ってるんだし」

「でさえ、つてのは、どーい言う草だよ」
照れ隠しに、怖い顔をして突っ込んでみた。

「やべ、墓穴掘った？」

「知らないっ！ 自分でフォローすれば？」

樹絵は軽く舌を出して、面白そうな表情で、そっぽを向いてしまった。

「冷てーなー！ いつつも、こーなんだよ？ 何とか言ってるよ」

「自分で何とかすれば良いだろ？ あたしが言うより、効き目もあるんじゃないか？」

「だって。化粧して、もう少しオレに、優しくしてくれ」

「何で？」

「見てみたいから」

「どーしよっかなあ……？」

二人の仲良い雰囲気、利知未は少し、当てられている気分だ。

「ご馳走様」

「え？」

「あたしの存在、忘れてるだろう？」

ニヤリと笑われて、準一が誤魔化し笑いをした。

「そー言うつもりは、ありません。倉真、遅いよね」

話を摩り替えて見た。利知未が反応するより早く、準一が注文したビールが運ばれて来た。摘みの一部も運ばれる。

「あ、やっと来た！ はい、乾杯、乾杯！」

利知未のグラスと樹絵のグラスに、準一がグラスを合わせて、一気に半分、飲んでしまった。二人も付き合っ、口を付ける。

そのタイミングで、倉真がやっと現れた。

「悪い、遅くなった」

倉真の姿を見て、利知未の雰囲気が一気に変わってしまった。それを見て、樹絵と準一が、軽く顔を見合わせた。

「仕事、忙しかった？」

樹絵達の前に居る時よりも、可愛らしい声になってしまふ。自分の声を耳で聞いて、利知未は少し照れてしまった。

「チョイな。よ、樹絵ちゃん、久し振りだな」

言いながら、利知未の隣へ腰を下ろした。直ぐに店員が注文取りに現れる。昔から良く来ていた店だ。倉真はメニューさえ見ない。

「中生。利知未も、追加するだろ？」

「あたしも、もう一杯、中生でいいよ。倉真、お腹空いてるんじゃない？」

「任せる」

「OK。じゃ、お握りで良いか」

さっきまで利知未に当てていた二人が、今度は当てられている気分だ。二人の雰囲気は、すっかり恋人を通り越して、新婚夫婦のようだった。

利知未が適当に、倉真の分も選んで注文をする。そして倉真も加わって、話を再開した。

「利知未に腹、切られた感想は？」

「大事な所、見られたかもしれない。責任取って貰わなきゃな」

「どー、責任取らせる気だ？」

「お婿に貰ってもらうとか」

「お前、俺に殺されるぞ？ そー言うコト言っつと」

「穏やかじゃないな。けど、そーかも」

利知未が笑いながら突っ込んだ。樹絵が参戦する。

「倉真にやられる前に、あたしが大事な所、ちゃん切ってる」

「あ、イーのか？ そー言うこと言っつて」

「いいよ、別に。そしたらあたしも、もつと真面目な男、好きになるし」

本気ではなくても、キツイ一言だ。それでも準一は、悪乗りをする。

「ンじゃ、オレ、新しい人生、生き直さなきゃ」

「新しい人生って？」

「胸、作って、スカート履いて、そー言う店で働く」

「透子に、そっくりに成りそうだな」

「トー子さんが、変な噂のタネになっちゃったりして？」

全員で笑ってしまう。このメンバー揃って、透子とも顔見知りだ。

「透子の事だから、調子に乗って、なにヤラかすか分からないよ」

「言えるかも。そう言えば、トー子さん、結婚したんだよな」

「披露宴、行って来たよ」

「新婚旅行先から、ノロケ葉書が届いてた」

「アイツらしい！」

自分が振った準一宛に、惚気葉書を出す当り、彼女らし過ぎるかもしれない。

「披露宴で、ミニライブやらされたよ」

「そうなのか?! 良いな、何時か、あたしが結婚する時もやってよ?」

「樹絵は、あたしのライブ、見たこと無いよな?」

「うん。だから、興味ある。な、利知未って、ライブ中はどんなだったんだ?」

「格好良かったぜ? 俺は、始めて利知未のライブ見て、マジ惚れたよ」

「男として、ステージに立って居たんだよな?」

「ああ。だから、兄貴分として惚れた」

「もう、いいよ。あの頃の事は」

「自分で振つといて、照れるか?」

「……だって」

赤くなり、照れる利知未を見て、樹絵が思わず、言ってしまった。

「利知未、可愛い！」

「樹絵まで、くだらない事いうな」

利知未が少し、怒った顔を見せる。その表情も女らしく、可愛らしかった。樹絵は、その顔を見てまた、にやけてしまう。

「後で、カラオケ行こうよ？ で、利知未さんに歌ってもらおう」

「いいな！ それ。したら、始めて利知未の歌、聴けるよ」

「カラオケ、なあ」

「倉真は、イヤなのか？」

「俺よりも、利知未だな」

「…余り、行った事は無いけど」

「けど、歌うのは好きなんだよね？」

「そりゃ、好きだから、三年近くもバンドやってただけだね」

「んじゃ、イーじゃん？ どうせ、酔い冷ましてからじゃないと、バイク乗って帰るのも危ないんだし」

樹絵と準一に押されて、この後の予定が決まってしまった。

話が変わって、準一が利知未に渡した、手紙が話題に上った。

「お前、入院中、利知未にちよつかい出さ無かっただろうな？」

「何で？」

「手紙を読ませてもらった」

「何だ？ 手紙って」

「ジュンが、利知未に渡した手紙だよ」

「…何、書いてあったんだよ？」

「倉真に飽きたら、お相手お願いしますって、書いてあったんだよ
ね」

「あ、ちよつと、タンマ！ 樹絵には、見せてないんだから！！」

「ほー。成る程ねえ……。ジュン…？ ナースだけじゃなくて、

利知未にも手を出そうとしたのか？」

樹絵が、鳴らない指の関節を、鳴らす振りをする。それに合わせて、倉真が自分の指の関節を鳴らしてやった。

「うわ、怖い音させないでよ？ マジ、樹絵が鳴らしたのかと思うじゃん?!」

「俺も、同じ気分なだけだ。さあて、ダチの女に手を出そうとした報復、させて貰おうか……?」

「いいぞ！ 倉真、やっっちゃえ!!」

笑いながら、倉真が準一の頭をグリグリとし始めた。樹絵が調子に乗って、その倉真を煽る光景を見て、利知未が笑い出す。

「冗談だよ！ ロープ、ロープ!」

「許さネー。食らえ!」

「タンマ！ オレ、病み上がりだつて!!」

「んな、元気な病み上がりが、居るかあ?!」

賑やかな席を、居酒屋の別の客達も、面白そうに観察していた。

それから、また一時間は、雑談をしながら飲んでいた。その内に、利知未と倉真の距離が、かなり近くなる。気付くと倉真の左手は、利知未の腰へと回っていた。二人の様子を見て、樹絵は少し、当てられてしまった。

居酒屋を出て、酔い覚ましにカラオケへ向かった。

利知未と倉真は、余りマイクを持たなかった。樹絵と準一が歌っているのを、盛り上げてやった。それでも二、三曲はマイクが回り、利知未は昔、ライブ時代にコピーしていた洋楽を、披露してくれた。倉真も中々、上手にハモリを入れてくれた。

その様子を見て、準一は利知未のFOX時代を思い出した。

樹絵は、始めて聞く利知未の歌と、その雰囲気の格好良さに、思わず見惚れて聞き惚れてしまった。

利知未がFOX時代、かなり人気があったという話を、納得してしまった。

その日、四人が解散したのは、深夜二時を回った頃だった。

貴方のために（利知未シリーズ 番外1）

2 研修医一年・四月

2 《研修医一年・四月》

一

四月に入り、利知末のシフトが正勤医師達と、殆ど変わりなくなつた。

五月までは、外来を見る訳でもない。決まった曜日で、決まった時間、と言う勤務日も無く、今まで以上に、バラバラな感じだ。

そんな中、笹原の利知末に対する態度が、少しずつ変わって来た。時間が合えば、夕食に誘う日も増え始めた。なるべく断つては来たが、三度目の誘いで、食事に付き合う事になってしまった。

何度か当日の誘いを断られた笹原は、作戦を変え、前日に誘ってみる事にした。それで利知末も断り切れなくなってしまった。

前日の内に、明日は会社の付き合いで遅くなると利知末から言われて、倉真は久し振りに、職場の先輩、保坂と飯を食いに行く事にした。

最近、倉真の帰宅は、平均して夜七時半前だ。利知末の仕事が終わるのが、通常勤務で、何事も無く終了する時は、五時から六時。病院帰りに買い物を買って、帰宅して飯の準備が整うと、丁度良いタイミングで倉真の帰宅となる。

夜勤や遅出の日は、その時々で、倉真も家事の協力をしてくれている。

貴方のために (利知末シリーズ 番外1)

笹原が誘う店は、毎回、色々だ。中華、フレンチ、イタリアン。

今回は和食の、今までよりも、高級そうな店へ入った。

「来週、婦長の送別会があるだろう？ 幹事のナースにお勧めの店を聞かれて、ここを紹介しておいたんだ。瀬川さんは、堅苦しい所は苦手だと言っていたからね。一度、下見をしたいかと思っただよ」

「そうなんですか？ 確かに、行き成りここへ来たなら、ビックリしてしまったと思います。有難うございます」

全ての席が、大小、様々な個室で仕切られた、料理屋だった。

一番狭い部屋でも八畳はある。最高で、十二畳の部屋を二部屋繋げて、二十四畳の和室になるらしい。

料理も、豪華な懐石料理と言う感じだ。

『会費、高そうだな』 そう考えて、利知未は少々、構えてしまう。来週の送別会は、その大部屋でやる事になるらしい。一人、一万円以上は取られそうだ。宴会料金は別で、少しは安くなっていると思いたい。

その夜は、二人で約三万円のコースを、奢ってくれた。

「本当に、ご馳走になってしまって、宜しいのですか？」

「僕が誘ったんだ。これでも研修医よりは稼いでいる。家庭を保持している訳でもないんだから、小遣いには困っていないよ」

「済みません」

「それに、今日は、今まで君に断られた、三回分を一度に使うだけだよ」

日本酒も出てくる。その酒も、随分と美味しい酒だった。

食事をしながらの会話で、今までと、笹原の様子が少し、違っている事に気付いた。

何気なく自分の家族の話しながら、利知未の生い立ちや家族の話、上手に水を向けながら、少しずつ聞いていく。

「君のお母さんは、今もニューヨークに居るのか」

「はい。数年に一度ほどしか、連絡もしていません」

「もしも、君が結婚をする事になっても、日本には戻っては来なさそうだね」

「そう思います」

「そうか」

何か、考えている。ふと笑顔を見せて、言い出した。

「僕も、家を継ぐつもりも無いんだけどね」

「ご長男ですか？」

「実家には弟夫婦が居るから、帰る家も無い。それよりも、病院で上り詰めたと思うっている」

「…、野心家なんですね」

「ただ、そろそろ、パートナーを見つけないと、その夢を果たすのも、難しくなりそうだ」

「笹原先生なら、直ぐに見付かるんじゃないですか？ ナースの間では一番人気だと、この前、入院していた友人が言っていましたよ」

「彼女達の人柄を言うつもりは無いが、先を考えた時、院内の力関係にも、影響を与えられる程の女性が必要だ」

「そうすると、院内有力者のお嬢さんが、良いのじゃないですか？」

「それでなければ、実力のある者が好ましい。……今、直ぐにどうと言う訳ではなくても、これから先、そう成り得るだけの、器の持ち主」

「それじゃ、中々、見付からなさそうですね」

「一人、注目をしている、医者のは居るんだけどな」

「私の同期か、一つ先輩ですか。何方でしょうね」

笑顔を見せて、誤魔化した。雰囲気、余り宜しくない。

「交わすのが、上手いな。自分の事は、候補者には数えていないと言う事かい？」

「私、ですか？ …それは、無理が在り過ぎると思います」

「どうして」

「まだまだ、ひよっこです。オペも一度しか経験しておりません」

実力を押し量るには、情報が少な過ぎると思います」

「けれど、インターン時代からの、君の成長振りは、この目で見て来ている」

「それだけです」

「それで十分だ。僕はこれでも、情報分析能力には自信がある」

「尊敬します」

「尊敬は、愛情へ変る可能性が無いだろうか？」

「……人に、寄ります」

「そうか。 ゆっくり、時間を掛けさせて貰うとしよう」

それ以上、突っ込んだ話しは出なかった。最近、悩み事や判らない事は無いかと問われ、仕事の話をして、二時間の会話を終え、帰宅した。

倉真は、今日も一時間半の残業だ。それから、保坂を誘って、飯を食って帰った。帰宅したのは、八時半頃だ。

利知未が、まだ戻っていないのを見て、風呂を洗って湯を張った。準備を終え、時間を見る。九時になる所だ。

「先に風呂、入っちゃうか」

つい、何時も通りに、タオルだけ持って浴室へ入る。

入浴を終え、脱衣所へ出てから、着替えを出しておくのを、忘れていた事を知る。失敗した。

「何時も、利知未が準備してくれてたからな」

ぼやいて、タオルで水分を拭き取り、そのままリビングへ向かった。

箆笥の中身さえ、何処に何があるのか判然としない。上から順番に開けて行って、下から二段目に、自分の下着が整頓されているのを見つけた。

タオル、バスタオル類は、また別の小さな引き出しに入っている。

それ位は分かっていたので、入浴前に、タオルだけは出す事が出来ていた。

『下から二段目って事は、一番下は……？』

つい、興味が勝って、引き出しに手を掛ける。恐らく、其処には。

「ただいま」

玄関から利知未の声がして、慌てて、手を引っ込めた。

「おう、お疲れ」

倉真の声がして、利知未が真っ直ぐにリビングへ入る。

「倉真？ ……って、風呂上り？」

「ああ、先に入っちゃった。これから、洗うよ」

「それは良いから、早くパンツ、履いてよね」

「悪い。何時も、お前が出して置いてくれるからな。うっかり、

忘れちまったんだ」

目の前でパンツを履く倉真を見て、笑ってしまった。

「何処に入っているか、判ったんだ。 ……もしかして、下の段、見た？」

「見てない、見てない！ 上から順番に開けて行っただ」

「……本当？」

「本当だ、本当」

慌てる倉真が面白かった。ジトリと、意味ありげな視線を向けて見た。

「……ま、信じてあげるとしよう。部屋着は、判った？」

「これで、良いんだろ？」

「上の二段が、倉真の部屋着と仕事着と、私服。真ん中の三段が、あたしの」

「みたいだな。で、クローゼットに一張羅な訳だ」

「そう言う事。クローゼットの中の引き出しは、殆どあたしのが占めてるけど。二人とも、服のサイズ大きいから。チョット小

さくなくて来たよ。最近着てないのとか、ボロボロなのは、今度の休みに整理しよう?」

「判った。何時、一緒になるんだ?」

「明後日は、倉真、仕事だね。明々後日の日曜かな」

「了解」

「今月は、その一日だけだな。倉真、今日、ご飯どつしたの?」
服を着ながら、倉真が答える。

「先輩と、食って来た」

「何、食べたの?」

「チャーハンと餃子と、ラーメン」

「じゃ、早く歯、磨いて来て……?」

軽くその腕を掴んで、服を着終わった倉真の頬にキスをする。

「晩酌、止めるか?」

「倉真は、晩酌したいよね? その間に、あたしはお風呂、入って来ちゃうよ」

笹原からの初アプローチに、何と無く疲れていた。

今直ぐに、倉真に抱いて貰いたいと思ってしまう。

利知未の色つばい雰囲気、その気が有る事を見て取る。言われた通り、利知未が風呂へ入っている内に、晩酌を済ませることにした。

寝室には、十時前には、引っ込んだ。

利知未から積極的だった。倉真は、その求めに答えてくれた。

二度、抱き合い、三度目を利知未が誘う。

「……何か、あったのか?」

「何にも、無いよ」

問い掛ける倉真の唇を、自分の唇で塞いだ。

「……ただ、今夜は、凄く、倉真に、もう一度、唇を重ねて、離す。」

「……会いたかったの」

「帰ってくれば、必ず顔、合わせるだろ？」

「その時間が、凄く、長かったから……。ね？」

「俺は、マダマダ足りなくらいだよ」

自分の身体の上にあった、利知未の身体を支えて、向きを変えてしまう。

その首筋に、利知未の腕が絡まる。もう一度キスをして、囁いた。

「……今夜は、一杯、……抱いて」

「明日、起きれなくなっても知らなーぞ？」

「いいよ。……そしたら、バイクで行くから」

それから、長い時間、抱き合った。

漸く身体を離し、眠りについた時間は、深夜を回っていた。

利知未は翌朝、それでも何時も通りに目が覚める。

昨夜は、倉真に思う存分抱いて貰って、疲れに紛らせて、眠ってしまった。それでも、良く眠れたのは二時間程度だ。

倉真が少し、寝坊してしまった。

利知未に起こされて、七時半に目を覚ます。

「悪い、寝過ぎした」

「いいよ、今日はバイクで行くから。ちゃんと、倉真の顔を見ながら、ご飯、食べたかったから」

「お前。本当に、何にも無かったのか？」

「無いよ。食事して、仕事の話して、帰って来た」

「そうか？」

「日本酒、飲んだけど」

笑顔を作って、話を変える。

「後、来週の土曜日、外科病棟の、婦長の送別会に参加しないとならないから、また、遅くなっちゃうよ」

「仕方ないな。久し振りに、アダムのお飯でも食って来るか」

「そうして。マスターに、よろしく」

「ああ」

二人で朝食を済ませて、利知未は一足先に、バイクで病院へ向かった。

何時もよりも、出掛けのキスが長くなってしまった。

その日、倉真の働く整備工場へ、かなり酷く傷ついたバイクが持ち込まれた。事故車両だ。運転していた本人は、大した怪我もしていなかった。

バイクを運んで来てから、精密検査だけして貰うからと言って、路線バスを利用して病院へ直行した。軽く足を引き摺っていた。

そのライダーが向かったのは、西横浜医科大学第二病院だった。

外来から利知未へバトンタッチされて、検査を引き受けた。

「外傷は大した事が無かった見たいですね。一応、レントゲンだけ取ってみましょう。あと、事故ですので、二、三の検査をして下さいね。結果は来週、火曜日にはお知らせできます」

若いライダーは、バトンタッチされてラッキーだったと思った。

研修医らしいが、中々、美人な医者である。背が高いのも、印象に残った。

『加奈子に、怒られるよな』

検査中も見惚れて、検査後、バス

を待ちながら思う。

彼の恋人は、少し焼き餅焼きだった。美術大学の学生で、事故ったバイクのペイントは、彼女の手になる物だ。仲間内でも評判が良かった。

思い出して、気になって、もう一度、バイクを預けた整備工場へ向かった。

足に包帯を巻いて、昼頃に来たライダーが再び姿を現したのは、夕方六時過ぎだ。工場自体は、夜八時頃まで客を受け入れる。従業員が帰った後は、社長とその娘婿と二人だけで、急な客の対応は出来る。

今日も、まだ従業員が居る時間帯だ。

「済みません、昼間のバイク、何とかなりそうですか？」

ライダーの対応に出たのは、倉真だった。

「チョイ、酷いな。新しくした方が、安いくらいだと思いますよ」

「修理、いくら掛かってもお願ひします。あれ、彼女がペイント

してくれたバイクで、大事なんです」

「部品、幾つか取り寄せになりますけど？」

「構いません」

「…そーだな、何とか頑張ってるか。病院、どうでした？」

「美人外科医を見つけました」

ポヤンとした表情を見て、その答えを聞いて、倉真はやや呆れ顔で、眉を上げる。

「怪我、大丈夫でしたか？」

もう一度問い掛けて、ライダーが慌てて首を縦に振る。

「打撲と、捻挫だけで済みました。貰い事故だったから、治療費は貰えるし。一応、検査もやりましたけど、来週の火曜には結果判るって」

「そりゃ、良かった。何処の病院、行ったんすか？」

「西区の、医科大学第二病院です。バス、あそこまで出てるから」
「で、美人外科医を見つけた訳だ」

軽く吹き出しながら突っ込まれて、照れてしまった。

「済みません。そんな事、聞かれてなかったですよね」

「いや。もしかして、研修医かと思ったモンで」

「美人外科医ですか？」

繋ぎの、左胸の名前の縫い取りを読んで、ライダーが続ける。

「館川さん、ご存知ですか？」

「チョイ、この前、風邪引いて行った病院が、そこだったんだ」

「背の高い、美人研修医、瀬川先生って言ったかな？」

名前を聞いて、利知未だと納得した。

女の話題で、気を許し合ってしまった。つい、雑談が始まりそうになり、先輩から呼ばれてしまう。

「バイク、下手したら一ヶ月くらい掛かると思っけど、いいっすか？」

「良いです。バイト料、入らないと、貯金じゃ足りなそうだし」

「来週頭に、見積もり出して置きます。電話連絡で、構いませんか？」

「ファックス、送って下さい。電話番号と同じです」

「判りました。んじゃ、お大事に」

「はい。修理、お願いします」

ライダーに頷いて、倉真は仕事へ戻って行った。

それから仕事に集中して、あの話題は頭の端に、追いやられてしまった。

利知未は一日、笹原と顔を合わせないように、或いは、二人きりにならないように、気をつけて過ごした。笹原が利知未を誘うの

は、何時も、二人になったタイミングだ。

余計な気を使って何時も以上に疲れて、夕方六時過ぎに帰宅した。

『倉真、昨日はラーメンだったって、言うからな』 今日、サツパリした物の方が、良いかもしれないと思う。

一品は、冷奴にしまった。他に、鳥の手羽先を、酢を使って野菜と共に煮込んだ。

味付けまで終わらせとろ火にして、ついダイニングチェアに掛けて、テーブルに突っ伏し、本の少し眠ってしまった。

良い匂いに目が覚める。

「やば！ 焦がした?!」

慌てて火を止め、煮物の蓋を開けて、中身を確かめた。

「焦げては、いないみたいだけど……。煮汁、殆どなくなってる」

危ない所だったと、息を付いた。顔を洗ってこようと、洗面所へ向かった。

『頬つぺたに、服の皺跡が着いてる』

もう一度、溜息が出て来た。顔を洗って、水が滴ったまま、鏡を見た。

『……今日は、特に何も無かったけど。 笹原先生、そう言う意味では、少し苦手なんだよな』

視線は、何度も感じた。それでも彼は、仕事中は周りの目を気にしており、積極的に目立った行動を起こすことも、無かった。

暫く呆然としている内に、倉真が帰宅した音がする。

「お帰り」

水滴をタオルで拭き取り、洗面所から声を掛けながら、キッチンへと出た。

「ただいま。 珍しいな」

まだ皿に盛られる前の料理を見て、倉真が少し驚く。

「今日は、遅かったのか？」

「そう言う訳じゃ、無いけど。 チョット疲れて、うたた寝しちゃったんだ。 煮物、焦がしちゃう所だったよ」

微かな笑顔を作って、夕食準備の続きを始めた。

「手、洗ってきなよ？」

「ああ」

少し心配そうな顔を見せて、倉真が洗面所へと消えた。

炊飯ジャーを開いて、飯が炊き上がっているのを確認した。 軽

く切り混ぜて、二人分の食事をテーブルへ並べた。

「チョット、手抜きしちゃった。 ごめん」

「疲れた時まで、無理すんな。 惣菜、買って来ちまっても構わネーぜ？」

「倉真のご飯は、成るべく自分で作ってあげたいから」

「サンキユ」

利知末の性格は分かっているつもりだ。 優しい笑顔を見せてくれた。

「食べよう？」 合掌して、夕食が始まった。

お互いに食事中は、仕事の内容的な話しは余りしない。 職場仲間とくだらないお喋りをした事や、昼に何を食ったか？ 次の休みは、どうしようか？ そんな話をする。

「今月の休日は、箆笥の整理に当てちゃうから、来月だな。 ついでに、冬物と夏物、少し入れ替えちゃおう」

「そうだな」

「今年の倉真の誕生日は、夜勤の入り何だよ。 家出るのは八時半頃だから、ご飯だけは一緒に食べられるな。 それだけでも、良かった」

「再来週の水曜か。 成るべく残業、早くに上がってくるよ」

「うん。 本当は、一日ゆっくり、一緒に過ごしたい所だけど」

「仕方ないだろ、お互いに仕事じゃ」

「ごめんね」

「謝る事か？」

倉真と話しながら、こうして食事を取る時間は、利知未にとって気持ちの休まる瞬間だ。一日、大変だったことも忘れていられる。

「明日は、あたしが休みだ」

「ゆっくり身体、休めるよ？ 朝飯、自分で食ってくから、のんびり寝ていて良いぞ」

「駄目。ちゃんと、一緒に朝ご飯、食べるんだから」

「そうか」

「うん」

雰囲気も言葉も声も、以前より随分、女らしく可愛くなってきた利知未を見て、倉真は最近、少し不安を感じ始めていた。

『今日の客も、利知未を美人だと言ってたしな。病院で好い男でも、出来ちまつたりしなけりや良いけどな』

「倉真？ 何、考えてるの」

声を掛けられて、気が戻る。

「ん、ああ。今日の客、思い出した」

「変わった人だった？」

「お前の病院へ検査に行った筈だから、お前も会ってるんじゃないかと思っただよ」

「事故？」

「バイク事故だ。貰い事故って言っていたな」

「検査、あたしが担当した人が何人かいたけど。その内の誰かは多分、判らないな」

「多いのか？ 検査しに来るヤツ」

「結構、いるよ。事故後の検査も多いから」

「そうか」

仕事絡みの話はここまでだ。食事を終え、一息入れた。

「あ、お風呂、準備してなかった」

利知未が、思い出して言う。

「俺がやるよ。お前、少し休んでろ」

「ごめん、ありがとう」

「気にするな」

「晩酌の準備、しておくよ」

それから、倉真が風呂の準備を終え、先に利知未に譲ってくれた。

風呂を上がり、二人で晩酌をして、誕生日のメニューを相談した。

「倉真、何が食べたい？」

「何でも良いぞ？」

「好きな物は、カレーに丼物に、揚げ物か。優兄と似てるな」

「優さんの好物は、何なんだ？」

「揚げ物。から揚げも、天ぷらも、トンカツも。カツ丼も好き

なんだよな」

「……裕一さんは、何が好きだったんだ？」

「……裕兄は、酢豚が好きだった。ばあちゃんの煮物も、美味しい

って、沢山食べてたよ」

「そうか。……酢豚、食わせてくれよ？」

「パイナップル抜き？」

「それで頼む」

「誕生日に酢豚って、何か詰まらなくない？」

「お前の最愛の兄貴が好きだった物は、俺の好物になる」

「……倉真」

涙が滲んで来てしまった。身を捻るようにして、倉真を抱しめた。

「……悪い。思い出させた」

「……ううん。倉真がいるから、平気だよ」

倉真に抱しめてもらい、利知未の涙が、ゆっくりと引っ込んだ。

「他には、何が好きだったんだ？」

「豚肉料理が、好きだったよ。生姜焼きとか、ピカタとか」
「俺も好きだよ。その内、色々作ってくれよ？」
「うん」

……倉真が、傍に居てくれれば、何時か裕兄の事も、笑いながら話せる日が来る。

収まった涙に、利知未は、そう感じる事が出来た。

翌日、利知未は朝、倉真と朝食を取った。何時も通りキスで見送り、筆筒の整理を少しだけ始めた。

裕一の形見の服は、倉真の引き出しに仕舞い直した。

『倉真が着潰してくれたら、他の服と一緒に……』 捨ててしまおうと、思った。

形見は服だけではなく、医学書だってある。医学書は、捨てる事は出来ないだろう。

思い出して、裕一の形見を一冊、本棚の奥から引っ張り出した。手に取り、開きかけると、パリリと一つのページが開く。

「……これ、」

白い羽が一枚、本の間から現れた。

『あの時の、倉真が拾った、白い羽。……裕兄の、羽』

大学四年の冬。二人の気持ちを、始めて伝え合ったあの日。

部屋の片付けをそのままに、利知未はアパートを出る。本をバイクのサイドバックへ入れて、裕一の眠る墓所へ進路を取った。

瀬川家の墓は、明日香が月に二回、墓参りをし、綺麗に整えてく

れていた。変えたばかりの新しい頭花を見て、それを知る。

本を墓前に開いて、頭を垂れた。

『裕兄の服。全部、倉真に上げてても、良いよね？』 代わりに着て貰って、ボロボロに成ったら、他の服と同じ様に処分をしようと思うと、報告をした。

『……多分、倉真はこれから、裕兄の変りに、ずっと、一生、あたしの傍に居て、守ってくれる人だから……』

「まだ、プロポーズもされて、居ないけどね」

顔を上げ、小さく呟いて、微笑を浮かべる。

『もしも、痺れ切れちゃったら、あたしからプロポーズしちゃうよ……きつと。』

女らしい笑顔の利知未に、裕一が、微笑んでくれた気がした。

日曜日、倉真に裕一のお下がり着を、着潰してくれるように頼んだ。倉真は頷いて、全ての服を受け取ってくれた。

二

十五日・土曜日。

男性・一万二千元、女性・一万円の会費を払った、豪華な婦長送別会が、例の店で行われた。

その日、笹原の参加は二次会からだった。その事に、利知未は少しだけ安心した。二次会はパスしても、問題ないだろうと考えた。

別の意味で最近、利知未は病棟ナースの人気者だ。実習医時代から仕事を共にして来た仲間だ。歳の近いナースとは色々、情報

交換もする。仕事の事だけではなく、最近人気のスポットや、料理の美味しい店、この春夏、流行のファッション。何人かに、朝美の働いている店も教えてやった。

医師は、男性ばかりだ。仕事の合い間や後の時間、束の間のお喋りは、やはり若い女同士、ナースの方が楽しい。

送別会のこの日、夜勤者以外は全員が参加した。何時ものお喋り相手も何人か一緒だ。始めから、ナースと医師の間に利知未を呼んでくれた。酒が進むと、医師との話の切れ目に女同士で会話が始まる。

二時間、和やかに過ぎた。記念品と花束が婦長に渡され、十時にはお開きとなる。

二次会をパスしようと考えていたが、仲の良いナースに誘われ、結局、顔だけは出す事に成ってしまった。

二次会の店まで予約済みだった。駅前のスナックで、独身ナースが全員、残った。勿論、ここから参加の、笹原目当てが半数を占める。

利知未と特に仲の良いナースは、そう言う気も無いらしかった。大部屋患者から恐れられている梅野も、その気配は見せない。

梅野は今夜、夜勤だった。彼女は今年の四月から主任職に就いている。未来の婦長候補だった。今夜、送られる婦長からも期待はされている。

「ただ、梅野さんは力を抜く事を厭うから。仕事はそうであって当然ですが……。ナースの中でも、賛否両論なのが気になる所ね」と、何時か、次を引き継いでくれるナースに溢していたらしい。

二次会が始まり、直ぐに笹原が現れた。婦長に挨拶をして、塚田医師と酒を飲みながら、話をする。利知未の事は、今は構わないで居てくれた。

更に一時間ほど経ち、利知未と仲の良いナースが出来上がってしまった。具合が悪くなった彼女を送るからと断って、利知未も席を立つ。

婦長と先輩医師に挨拶をして、店を出ようとした。

「夜の街は、危険だよ。僕も通りまで送って行こう」

そう、笹原が言う。近くで酒を飲んでいたナースが、笹原に言う。

「流石、お優しいですね」

「送るだけだよ。彼女をタクシーに乗せたら、戻るよ」

塚田に会釈をして、利知未たちの後に続いて、店を出た。

酔い潰れた友人をタクシーに乗せて、利知未は息を付く。

「瀬川さんは、このまま帰るのか？」

「そのつもりです。お先に失礼します」

「少し、酔い冷ましに付き合ってくれないか？」

「皆さんが、お待ちでは有りませんか？」

「今夜の主役は婦長だ。時間はそれ程、取らせないよ」

言われて、断り切れなくて、近くの公園へ向かった。

ここまでの一週間で、笹原は時々チャンスを見ては、利知未にモーションを掛け始めていた。

公園へ向かう二人の影を、見かけた者が居る。

先週、倉真の働く整備工場へ、事故車両を運んで来た青年だ。

土曜の夜で、恋人と二人だった。後を付けるつもりも無く、彼女と自然に、同じ公園へと腕を組んで向かっていた。

笹原にも勿論、見覚えがある。外来で彼に検査結果を知らせたのは、他でもない笹原だった。笹原と利知未は、身長差が余り無い。

2、3センチ程だろうか？彼女に腕を引っ張られながら、前を歩く二人の影を、無意識に視線で追いかけていた。

ベンチに腰掛けた二人を見て、何と無く、自分も手近なベンチへ腰を下ろした。

「卓也、どうしたの？ 酔っ払った？」

「チヨット休憩」

「年寄り臭い」

「何時もバイクだから、歩くのは疲れる」

「バイクの方が、疲れそうだけど」

言いながら、彼女も彼の隣へ腰を下ろす。取り敢えずその肩を抱いて、頭を自分の肩へと預けさせて、少し先のベンチへ掛ける二人の様子を、何気なく観察していた。

笹原は、利知未タイプに遠回しな誘いだけでは、無理だろうと踏んでいた。

この夜、いいチャンスが訪れたと思っていた。酒の勢いに任せた振りをして、利知未へ、決定的なアプローチを仕掛けようと計算している。

「瀬川さんは、酒に強いようだね。食事を誘った時から思っていたけど」

「そうですね。昔から、良く言われています」

「僕は、普段はそれ程、飲まないのだけどな。今夜は、少し飲み過ぎた様だ」

「頭、少し冷やしますか？ ハンカチ、濡らして来ます」

逃げ口上だ。立ち上がり、水道へ向かう利知未の腕を掴んで、引き寄せた。

そのまま唇を奪ってしまった。身動きをする利知未を押さえ込む。

『……投げ飛ばしたい、所だけど』 流石に、先輩外科医相手に怪我でもさせたら、大変な事になる。

笹原は唇を離して、そのまま利知未を抱すくめてしまった。

その様子を、青年ライダー・卓也は目撃してしまった。

「うわ、マジかよ?」

小さな呟きを、加奈子は聞き逃さない。

「何? 知り合い? ……チヨット、あんまりジロジロ見ないの!」
彼女に腕を抓られて、小さく悲鳴を上げた。

「結婚を前提に、どうだろう?」

「……」

抱すくめられたまま、何も返せない。

「勢いだけで言っているのじゃない。君は聡明だ。そして、優秀だ。その聡明さで、将来の僕を支えてもらいたいと、本気で考えている」

「……判断、早過ぎます。買い被りです。それに、……ごめんなさい。何度、言われたとしても無理です」

「誰か他に、付き合っている相手が居るのかい?」

利知未は無言で頷いた。

どうしてもつと早くに、倉真の事を、言わなかったのかと、後悔をした。

笹原が、力を緩めて言う。

「そうか。その彼は、君との将来を、どう考えているのだろうか?」

「……それは、」

「まだ、そう言う相手では無いという事か。それならまだ、僕にも付け入れる隙はあるだろう。直ぐには言わない。じっくりと、考えてみてくれないか?」

笹原の腕から逃れて、利知未は慌てて走り去った。

目の前を走り去る利知未に見付からないように、卓也は彼女とキスをして、やり過ごした。

駅まで走り、息を付く。呼吸を整えて、構内を通り抜けて、駅向こうへと出た。利知未たちのアパートは、病院と、駅を挟んで南北の位置関係だ。

構内を抜けてから、呆然と歩いた。唇がむず痒くなってきた、自動販売機を探す。ペットボトルのミネラルウォーターを買って、道の隅で嗽をした。

「……倉真」 壁に手をついて、力が抜ける。小さく、呟いていた。

残りの水を道に捨て、歩き出す。

空のボトルは、途中の自販横に設置されている、ゴミ箱へ捨てた。段々と、早足になり、気付くと、小走りしていた。

倉真はその日、夕方から久しぶりに、アダムへ行つて見た。

マスターは、相変わらずの笑顔で倉真を迎えてくれた。

「暫く振りだな。利知未は、元気になっているか？」

「久しぶりっす。利知未は、最近チヨイ疲れているみたいだな」

「そうか。仕事に慣れるまで、大変なんだろう。今日は、どうした？」

「職場の付き合いで、送別会があるって。飯、食わせて下さい」

「普通りで、良いのか？」

「頼みます」

「畏まりました」

笑顔で頷いて、ディナーディッシュ・Aと、伝票へ記入する。

「珈琲は、どうする？」

「…野良猫で」

少し考えて、愛称で注文をした。 飯の前に、珈琲が出る。

「これ、淹れ方は誰が淹れても、同じ筈なんだよな」

「その筈だが？」

「……利知未の味と、マスターの味は、少し違う感じがする」

「愛情の差、じゃないのか？ 利知未が淹れた方が、お前には美味いんだろう」

「利知未の味は、優しい気がする。 マスターの味は、燻し銀って感じだな」

「人柄の差か？ いい所、ついていると思うぞ。 今度は、別所の味とも比べるか」

「ンじゃ、昼間来ないと成らないな。 仕事だし、無理そうだ」

「日曜は、昼間に居るぞ。 今度、利知未と遊びに来い」

「来月まで無理そうだ」

「休みは、中々、合わないのか」

「今月は、先週の日曜だけだったな」

「そうか。 色々、大変だな」

「まあ、アイツには、世話かけっぱなしっす」

「利知未は、イイ嫁さんになると思うぞ」

「……俺も、そう思います」

「精々、惚気て行ってくれ。 デイナーディッシュ・A、お待たせ致しました」

出来立ての、懐かしの味を、マスターが出してくれた。

五時半頃に入り、七時には店を出た。 ここからバイクで三十分だ。

帰ったら、風呂の準備をして置いてやろうと思った。

利知未の帰宅は遅かった。 十二時を過ぎて、静かに玄関のドア

が開く。

「帰ったか？」

「倉真。起きてて、くれたんだ……」

それだけで、心の底から嬉しいと感じる。

出迎えてくれた倉真に、くたびれ果てた身体を預けて、抱きついた。

「どうした？」

「……何でもない。チョット、飲み過ぎただけだよ」

肩を抱いて、身を支えるようにしながら、キッチンへ入る。

ダイニングチェアを引いて、利知未を座らせてやった。水を汲んで出してくれる。

「ありがとう。……倉真、優しい」

呟いた利知未に、何と無く、気持ちのざわめきを覚えた。

「飲み直すか？」

水を飲んで、利知未が言う。

「お酒は、もうイヤ。シャワー、浴びてくる」

「風呂、入ってるぞ。沸かし直すか？」

「そうだね、明日も仕事だし、のんびり浸かって、身体、休めるよ」「そうしろ」

追い炊きのスイッチを、倉真が入れてくれた。

翌朝、利知未は仕事へ出掛ける。

「今日は、五時には上がれる筈だから、ちゃんとご飯、作っておくね」

「お前、マジ平気か？ 無理しなくて良いぞ」

「大丈夫。倉真が何時も、協力してくれてるからね。今日も洗

濯物、頼むね？」

「ああ」

「じゃ、行ってくる」

キスをして、一度離れかけて、もう一度キスをした。
倉真の首筋に腕を絡める。

唇を離して、抱きついた姿勢のまま、利知未が囁いた。

「……本当は、一緒に過ごす時間、もっと欲しいよ」

腕を放して身体を離し、向きを変えて、玄関へ向かう。

その利知未を見て、倉真は昨夜の気持ちのざわめきを、思い出した。

十七日、十八日の休日を、利知未は心の底から、のんびりと過ごした。

病院に行けば、笹原と顔を合わせる機会を、成るべく少なくしようと、変に気を使う。それでも彼は、隙を見ては利知未に誘いを掛ける。

他の医者や、ナース、患者達の前では、勤めて今まで通りの態度を貫く。その点、笹原はしたたかだった。

翌日、利知未は夜勤だ。倉真を送り出し、昼間、家事を終え、仮眠を取る。

今日は、倉真の誕生日だ。約束通り、パイナップル抜きの酢豚を作った。

「今日が休みだったら、良かったのに」

急いで帰宅した倉真と、夕食を共にする。

「少しは、元氣出たのか？」

「約三日間、のんびりさせて貰ったからね。来月の予定でたら、休日の相談しよう？」

「ああ。久し振りに、ツーリングも良いかもしれないな」

「うん」

笑顔で頷いて、今年のプレゼントを渡す。

「靴、そろそろ、ボロボロだったから。今年は、これで良い？」

「助かる」

「じゃ、もう行かないと」

キスを交わして、玄関へ向かった。

アパートを出てから、憂鬱が復活する。

『今日は、笹原先生と時間、合わなかった筈だよ。……良かった』
少しだけホッとして、歩き出した。

ふと、最近の自分自身を振り返った。倉真の前で、女らしくしてしようと決めてから、随分、変わって来たと、自分でも思う。

その変化が、余計な恋愛ごとを、生み出しているのかもしれない。

『もう少し、昔の自分、出した方が良かったのかな……？』

病院では羽目を外さない程度に、態度を改めた方が、良いのかも知れないと思った。

月末、五月のシフトを渡された。

来月は、二人一緒の休日が、二日はあった。それでも足りないと思う。不満を抑えて、早速、休日の予定を話し合った。

3 研修医一年・五月

3 《研修医一年・五月》

—

ゴールデンウィーク中は、殆ど二人の休みが重ならなかった。それでも倉真の整備工場は、飛び石出勤予定だった六日を休みに変え、月の隔週土曜休日をずらしてくれていた。二日しかなかった筈の二人の休日が、四日に増えた。

「来月は、また元通りに戻るからな。月末から月頭は、隔週休みにはならない筈だよ」

「それでも、嬉しい」

晩酌時間に寄り添って、利知未が本当に嬉しそうな笑顔を見せる。「じゃ、予定変更して、チョット遠出も出来そうだね」

「どこか、予約取れるんじゃないか？」

「泊まりで出かけるって事？」

「それも良さそうだ」

「今月は厳しいな。先月、送別会でお金、掛かったから」

「仕方ないな。またの機会にするか」

「その代わり、石廊崎辺りまで、足、伸ばしてみる？」

「久し振りだ、そうするか」

「倉真、明日から五連休になるのか。あたしは、三日間は仕事だ」

「夜勤か？」

「そう。一応、明日の夜までは時間ある事になるけど。その代わり六日の土曜日は、夜勤明けで何処にも行けなさそうだ」

「石廊崎は、二十、二十一日の方が良いな」

「そうだね。今月から水曜日の午後だけ、外来も担当する事になったから、水曜が絡む勤務日は、夜勤にはならない筈」

「他の医者は、どうなってるんだ？」

手元にあつた病棟の医師達のシフトを確認して、利知未が答える。
「曜日で外来決まってるから、それに合わせて夜勤シフトが入る感じだよ。あたしも外来を週二日間とかで担当するようになったら、予定も組み易くなる筈だけど。ポケベルも持たされてるからな。」

来年当り、携帯電話になる予定だった」

「携帯、ね。俺も持った方が良いのか？」

「最近、持っていない方が珍しいって言われる。けど、お金、掛かるからな」

「医者稼ぎなら、平気じゃないのか」

「倉真、将来の為の貯金、してる？」

「……アンマ、溜まってネーな」

「だよ。尻に火が付かない限り、無駄な出費は避けたい所だし」

「来年、お前が病院から持たされるようになったら、一応は考えるか？」

「そうだね、楽にはなると思うよ。……成るべくなら、使わない様にしたいけど」

「仕事じゃ仕方ないだろ」

「その話は、その時が来てからで良いよ。それまでは出来る限り、例え少しでも貯金して、将来に備えないとね」

「……だな」

医師に携帯を持たせる前に、病院内の、環境を整える必要がある。

電磁波による医療事故が、ここ数年で増えていた。その関係で、後二年で世紀を超えようとするこの時期に、利知未達は、まだポケベル生活だ。

それはそれで構わないとは、思っている。元々、長電話をする時間も無ければ、大半の用事はパソコンで足りていた。

明日から連休の倉真と、明日は夜勤入りの利知未だ。その夜は何時もよりも長めに、晩酌時間を取っていた。

一時を回ってから、漸く寝室へ引っ込んだ。

軽くアプローチをする倉真を宥めて、大人しく眠ってもらった。

利知未は今、月の物が来ている。避妊薬を使い始めて、月末の周期から少しずれて月頭の周期に変わっていた。

まだ、倉真は、利知未がピルを服用している事を、知らない。

連休中は、外来は受けない。救急で患者を受け付ける。

この三日間の夜勤は、外科病棟の、臨時体制に備えての物だ。勿論、救急のヘルプも、何時も通りである。

ここまでで利知未は、簡単なオペを執刀する機会が何度かあった。盲腸患者も運ばれてくる。軽い内は、痛みを散らす処置で終わる。その他、心臓は循環器科があり、脳は脳外科の担当だ。骨折や、胆石、その他、幾つかの処置は外科の仕事になる。事故後の処置も勿論、大半が外科だ。

食中毒や、睡眠薬の異常摂取は、内科だ。同じ理由でのリストカットは、外科の仕事。

今も時々、利知未は救急に来ないかと誘いを受ける。誘われても、決定権は違う所にある。

今夜の夜勤相棒は、もう一人の独身外科医、藤澤だった。笹原は、この三日間で最後の夜に同じになるだけだ。

二日間は、それでもいくらか、安心して仕事へ勤しむ事ができる。

本の少しの空き時間に、利知未が淹れた珈琲を飲みながら、書類整理などしていた。

「瀬川さんは、初オペが早かったね」

仕事をしながら、藤澤が言う。

「そうですね。藤澤先生は、どの位で執刀されたんですか？」

「僕は、二カ月後、位だったかな？丁度、今頃だったかもしれない。連休で、はしゃいで羽目を外す若者が、必ず居るんだよ。」

この時期は」

その話の途中で、救急からのヘルプ電話が入った。

「事故だそうです。救急」

「言ってる傍から、だ。行くか」

「はい」

白衣を羽織って、二人で薄暗い廊下を、小走りして行った。

その事故は、乗用車の対物事故だった。かなりのスピードで、ガードレールへ突っ込んだらしい。男女の四人で酒気帯び運転だった。

アルコールの所為で、血が中々、止まらなかった。運び込まれた時、助手席にいた男性は、既に危険な状態だった。

利知未は医者として、救急で始めて、助けられない命に直面した。

明け方、仕事終わりに、ロッカールームで利知未は、静かに涙を流した。

「この仕事をして行けば、避けられない経験ではあるから。……

余り、気を落とすなよ？」

藤澤は先輩医師として、肩を落とした利知未にそう声を掛けてくれた。

帰宅して倉真の顔を見て、ホツとした。

「何か、あったのか？」

「……ニュース、見た？」

「朝のニュースか？ まだ、見てなーな」

「……一人、助けられなかった」

「……そうか。……風呂、入ってるよ」

「うん、ありがとう」

小さく頷いて、利知未は脱衣所へ向かった。

風呂を上がり、倉真が用意してくれた朝食を少しだけ口にして、利知未は、泥のように眠ってしまった。

夜勤三日目、五日の夜、笹原と時間が同じになる。

「辛い経験を、一つしたね。どんなに頑張っても、避けられない事もある。気を落とさず、心を強くもつんだよ」

そう言っつて、その夜は可笑しなアプローチもせず、静かに仕事をさせてもらえた。その点だけは、有り難かった。

七日の日曜は、のんびりと過ごした。元気の無い利知未を心配し、倉真がタンDEMシートへ乗せて、連れ出してくれた。

遠出はしないで、横浜の観光スポットを回る。丁度、山下公園では、大道芸の大会が行われていた。

ジャグラーの技を見て、驚いて、漸く利知未に笑顔が戻る。珍しくアイスなど買って、食べ歩いてみた。

バラ園の花の蕾が徐々に色付き、膨らみ始めていた。五月中旬から六月に掛けて、その見頃を迎える準備をしている。

「船上ビアガーデンも、今年の夏頃には、行ってみたいな」
山下公園に泊まっている、船があった。

夏にはその船上で、毎年ビアガーデンが催されている。

「それも良いな。お前と始めてデートらしくなったのは、もう三年前の、お前の誕生日だったよな」

「あの時、大学近くのビアホールに行ったよね」

「ああ、覚えてるか？」

「忘れる訳、無いよ。……ほら」

シャツの中から、真珠のネックレスを手繰り寄せて見せた。

「倉真も、今も持っていてくれてるね」

タバコに火を着ける、そのジッポーは。あの年、利知未が倉真に

上げた、誕生日プレゼントだ。

「大地震が起こっても、コイツだけは持って逃げるよ」

「あたしも、これだけは持って逃げないと」

「勿論、お前も抱えて逃げるぜ？」

おどけた言葉に、利知未が笑った。元氣を取り戻したその笑顔に、倉真もいくらか気分が晴れた。

「じゃ、もう少し、ダイエットしておこうか？」

「益々、胸がなくなるぞ？」

「倉真、そう思ってたんだ」

「冗談だ」

「本気でしょ？」

「冗談だよ」

「いいよ。その内、豊胸手術でもしてくるから」

「触り心地、変わっちゃうまいそうだから、止めてくれ」

「スケベ」

「久し振りの褒め言葉だよ」

膨れた利知未を、引き寄せた。肩を抱いて、海と船を眺めやる。頭を倉真の肩に預けて、利知未も漸く、気分が落ち着いていた。

翌日、病院に準一が来た。外来から、利知未にバトンタッチされた。

「また、どっか痛いのか？」

「違う違う、健康診断。オレ、一応、就職したから」

「そうなのか？ おめでとう！ 何の仕事だ？」

検査の準備をしながら、雑談になる。

「カメラマンの、弟子」

「カメラマン？ カメラなんて、弄ったことあったか？」

「無いよ。別の才能を買ってくれた」

「別の才能、ね。兎に角、良かったよ。樹絵には、会ってるのか？」

「連休中、引っ越したんだ。新しい住所、利知未さんにも教えるよ」

「樹絵は、その部屋へ泊まったのか？」

「そう。ついでに引越しの手伝い、して貰った」

「ちゃっかりしてるな」

「二人の、愛の巣だから」

「言ってる」

笑ってしまう。昔に戻ってしまったていた自分の態度と言葉に、軽

く舌を出した。ナースがチラリと、利知未を見ていた。

「じゃ、胸部検診から、回って下さい」

「了解」

準一は、検査へ回って行った。

午前中、早いうちの来院だった。折角だったので、昼を病院の近所の店で一緒に済ませた。そこで、里真と宏治の、その後を聞いた。

「あの二人、別れたのか」

「そうらしいね。樹絵が言ってた」

「何時頃の話だ？」

「今年の二月だったって。最近、里真ちゃんが秋絵ちゃんに連絡をして来たらしい。そこから樹絵に回って、オレに回った」

「そうか。…ま、どうなるかなんて、誰にも判らない事だからな」

「今は、新しい恋人が居るらしいよ。その内、結婚する事になるみたいだ。その報告ついでの連絡だったらしいから」

「結婚、ね」

呟いて、自分達の事を考えた。笹原からも、今もアプローチは続いている。

……倉真は、その気が、有るのだろうか？

それでも、研修医は終えてから、正勤医師として、せめて数年は

働いていたいとも思う。

金を貯めるだけではなく、一つの悲しい経験を通して、利知未も改めて、自分の仕事に対する意識が変わり始めた所だ。

『人を助ける為の、資格はあるんだから……。一人でも多くの人を、助けたい。……家族が亡くなるのは、本当に、悲しい事だから……。』

裕一の事、和泉の妹・真澄の事。そして由美と、ついこの前、目の前で息を引き取ってしまった、青年の事。

大叔母や大叔父は、確かに早めの死だったが、ある意味では、寿命を全うしての結果だ。

……人は生まれた瞬間から、死に向かって歩き始めているのだから。

けれど、若過ぎる死は、悲し過ぎる結末だと思う。

その日、壊れたバイクの修理状況を見たくて、卓也が整備工場へ顔を出す。

そこで、倉真は、知りたくなかった事実を、耳にしてしまった。

「バイクは予定通り、来週には直りますよ」

卓也は、この前、倉真が対応に出てから、何と無く話をしやすい客だ。

「そうですね、有難うございます。修理費、引渡しの時が良いですか？」

「勿論、構いませんよ。金額がデカイから、振込用紙も出せますけど？」

「現金、持って来ます。……それより、この前の話し、覚えてますか？」

「この前の話？」

「病院の、美人研修医」

「ああ。覚えてますよ」

笑顔を見せながら、心の中では思う。

『その研修医が、俺の彼女だと知ったら、どんな顔、すんだろっかな？』

一月近く経ってから、この話を引っ張り出してくるところを見ると、彼は随分、利知未に憧れているらしい。

「一寸、シヨックなシーン、目撃しちゃったんですよね」

「シヨックなシーン？」

「同じ病院に、三十代の外科医が居るんですけど、どうやら、深い関係みたいで」

倉真は目を丸くする。どこからどうして、そんなガセネタを掴んで来たのだろう？

「この前の夜、デート中に二人のキスシーン、目撃しちゃって。

……シヨックだったなあ。彼女が居るから、本気つつもりも無かったんだけど、少し憧れてたから」

信じられない思いで、倉真は自分の耳を疑う。

「…見間違いつて事、ないっすか？」

「目の前、走って行ったの、確かに瀬川先生でしたよ。僕、慌てて顔、隠しましたから」

「夜だつたらしいし、他人の空似つて事は、あるんじゃないかな」

「あんなに背の高い美人、見間違えないと思いますよ。相手も、同じ病院の医者だった訳だし」

倉真と利知未の関係は、勿論知らない。この前、話していて、どうやら彼も以前、病院で見かけた美人外科医に、少しは憧れを持っていたのではないかと、勝手に想像していた。

同じファン精神を共有できる相手かも知れないと、思っただけだ。

けれど倉真の態度を見て、少し考えてしまった。

『何か、もしかして、おれよりよっぽど彼女に憧れてたとか？』

それ位は、感じた。　倉真は、複雑な思いを抱えてしまう。

『……まさか、な』

昨日、利知未と出掛けた山下公園での、あの笑顔を思い出す。

昨夜は、月の物が終わつた利知未を、思う存分、抱いてから眠つた。

『在り得ネー』　そう、自分の気持ちを無理矢理、納得させて、卓也にバイクの修理状況を話して、見送った。

倉真と利知未の、連休までの間にも、笹原は、アプローチを続ける。

そろそろ、勘の良いナースの一部では、可笑しな噂が流れ出している。

卓也から、要らない情報を齎されてからの倉真は、少し様子が変わり始めてしまった。

何時もと代わらない会話の中で、ふと何かを言いかけて、話を摩り替える。　今までの倉真には、無かつた事だ。

笹原からのアプローチで疲れ始めた利知未の心に、倉真の態度が影を落とす。　気分が落ち込んで、どうしようも無くなった頃。

どうしても避けられないタイミングが、再びやって来てしまった。

仕事中は成るべく、二人きりになる事を避けていたのだが、やはり、それには限度があつた。

二人は、同じ病院の外科医だ。

その時、利知未は、カルテの整理をしていた。　ここまでで自分が担当して処置を済ませ、無事、退院の運びとなった患者も、十人は超えた。

今後の勉強も兼ねて、患者のカルテを見ながら、症例や症状によって違う、回復までの経緯や、投薬の種類等、復習しなければならないことが多い。

少し前までは、他の医者と同じ部屋で、作業をしていた。入れ違うように、笹原が部屋へ入った。作業の途中で慌てて席を立つ事も出来なかった。

利知未は笹原に頼まれ、珈琲を淹れて出した。その手を、笹原が確りと掴んで、離さない。

「この前の話し、どうだろう？ 僕は、本気だ」
行き成り核心を突いて、切り出されてしまった。

「……手を、離して頂けませんか？」
「今の返事を、聞かせて貰えるかい？」

答えない限りこの手は離さないと、その表情が言っている。
「済みません。時間を戴いても、私の気持ちは変わりません」

YESでも、NOでも。取り敢えず、返事を聞いたら、良いだろうと考えていた。その時の利知未の態度を見て、今後の対応を検討するつもりだ。

笹原は素直に、その手を開放した。

利知未は慌てて、その手を引っ込める。

「そうか。もう少し、待つ必要があると思うだ。済まなかったね」
怒りに似た感情が、利知未の心に沸き起こった。
声も出さずに向きを変え、早足で医局を出て行った。

二

医局を出て、喫煙所のある中庭へ向かった。白衣の下、シャツ

のポケットには、一応タバコを常備している。 仕事中は忙しくて、吸う暇も余り無かった。

廊下で、薬局勤務の片岡 香と擦れ違った。 利知未の、病院での数少ない友人だ。

「瀬川先生、何時もの薬、出てます」

「有難うございます」

「手が空いたら、取りにいらして下さいね」

「…それなら、今から行きます」

用事を済ませて、薬局へ戻る途中だった香と、話しながら歩き出す。

「香さん、チヨイ、時間ある？」

「今からなら、少しくらいは平気よ。 相談事？」

「…まあ、そんな所」

「この書類、持って行ったら、利知未さんの薬出して、休憩ついでに少し付き合えるわよ」

「ありがとう」

「どういたしまして」

業務連絡以外なら、小声で、何時も通りの会話になる。

病院で香と話す時は、何時も同じだ。 インターン時代からの友人である。 偶には仕事の後、居酒屋へ気楽な酒を飲みに出掛けていた、唯一の存在だ。

利知未よりも二歳年上の、お姉さんである。

薬局に着き、何時も通りに処方された避妊薬を受け取り、二人で中庭の喫煙所へ向かった。 病院内は喫煙所以外、医局でさえ禁煙だ。

近くに症状の軽い患者も数人居たが、中庭のベンチの、あちらこちらに散らばっている。 利知未は缶ジュースを二本買って、一本を香へ渡した。 空いているベンチへ腰を下ろし、タバコを取り出

した。

利知未が話を切り出す前に、香が聞く。

「もしかして、笹原先生？」

「…どうして？」

凶星をつかれて、目を丸くする。

「一部では、最近、噂の的になってる」

「一部？」

「彼を狙っていたナースや、興味は持っていたって言う、薬局、会計など等の、女性従業員達」

「……そー言うのって、判っちゃうもの？」

笹原も、周りの目は気にしていたと思う。自分も勿論、気を付けていた。

「貴女より、彼の態度が問題ね。ちょっとした仕草や会話で、耳ざといコや鋭いコは、直感するもの。後は、視線？ この前、貴女のことを彼が熱い眼差しで見つめていた、何て、誰かの一言が、火を着けちゃったみたい」

「……参ったな。噂になる程とは、思っていなかった。断ってるんだけどね」

「でしようね。私は、あなたの事情を知ってるから。偶に噂してるところへ文句を言ってやりたい心境に駆られて、イライラしてるわよ」

産婦人科の滝川医師も、利知未の事情を知っている。彼女も、その噂を聞く度に、眉を潜めているらしい。

「この前、若いナースが滝川先生に『他人の噂に振り回されなさいで、貴方達は貴方達の仕事に、集中しなさい』って、叱られた見たいよ」「香さんの耳は、噂話の宝庫みたいだな」

「私も、そろそろお局様の部類ですから。院内での細かい噂話は、入り易い位置に居るのよ。……詳しい話、夜にでも聞きましょうか？」

「佐助？ そうだな。今日、何時上がり？」

「何時も通りよ。利知未さんは？」

「特に何も無ければ、遅くても六時には上がれると思うけど」

「じゃ、七時過ぎに佐助。彼氏に連絡しておいてね？」

「そうする」

「笹原先生、昔からその手の噂、多い人なのよね。気をつけた方が、いいと思うわよ」

「……気を付ける」

今まで以上に、注意しなければ、ならないかもしれない。

缶ジュースを飲みきり、利知未がタバコを吸い終わってから、ベ
ンチから立ち上がる。そのまま、其々の仕事へ戻って行った。

利知未は、長めの残業になってしまった。仕事を終えてから自
宅へ電話を掛けて、ふと思う。

『やっぱり携帯電話、お互いに持った方が、便利かもしれない』

今の状態では、留守番電話を聞いた倉真が、夕食の準備を自分でし
てくれるか、どこかで済ませる事になる。

帰宅前に倉真が電話をすれば留守電メッセージも聞けるだろうが、
帰宅してから聞いて、それから夕食の事を考えるのでは遅過ぎるだ
ろう。

少し考えて、倉真の職場にも連絡を入れて見る事にした。

七時前の事で、倉真はギリギリまだ職場に居た。

「館川、電話だ」

「どーも」

「彼女か？」

保坂に言われて、相手が女である事を知る。

利知未は倉真の声を聞いて、始めに謝った。

「仕事場に連絡して、ごめん。急に、香さんと飲みに行く事にな
ったから。夕飯、自分でやってくれるかな？」

一瞬、本当に香が相手かと、疑ってしまふ。それでも、職場で

ある。

「判った。ンじゃ、もうチヨイ仕事してから、飯食って帰る」

「そうしてくれる？ じゃ、邪魔してごめん。仕事、頑張ってる」

利知未からの電話を切って、香が誰か思い出した。

『薬局のネーちゃんか？ そー言や、利知未のダチだったな』

以前、あの病院に掛かった後で、利知未が言っていたのを思い出した。

本当に彼女が相手ならいいけどな。 そうも思った。

少し遅刻して、利知未が約束の居酒屋、佐助へ現れた。

詫びながら、カウンター席に座っている香の隣へ掛ける。 問わ

れて直ぐに飲み物を注文した。 席に落ち着いてから、香が聞いた。

「本当に、ここで良かった？」

「これだけ賑やかなら、あたし達の話しに注目する人も、居ないんじゃないかな」

「それもそうね。 明日は、仕事？」

「明日は休み。 久し振りに倉真と、連休で同じに成ったよ」

「良かったじゃない」

「……うん、良かったのか、悪かったのか」

「彼氏との事でも、何かあるの？」

笹原の事だけかと思ったら、飛んだ副産物が付いて来た。 今夜は、

じつくりと話を聞いてやろうと、香は思った。

早速、出された中生で軽く乾杯をして、口を付ける。 それから

利知未がおもむろに言い出した。

「倉真、最近、ヘンなんだよね」

「ヘンって、どういう風に？」

「……なんか、今までのアイツらしくない感じが、偶にね」

何かを言いかけて、止めて、話を摩り替える。 倉真との会話の

中で、そんなタイミングが増えている。

「今までのアイツは、言いたくない事、全く触れなかったから。」

頭から外して話をする癖があるんだ。それで真意が判らなかつた事も、時々はあつただけだ。何か、半端な隠し事、持たれてるみたいだ」

「隠し事、ね。隠し事の二つや三つ、あるのは当たり前だとは思うけど」

「だから、半端な、隠し事。隠すのなら徹底的に隠すよ、倉真は」
「そうなの？」

「うん。前、誕生日の時もそうだった」

去年の、誕生日プレゼントを貰った時の事を話した。

「カッコイイ事、してくれるじゃない。と言うより、可愛い？」

「……うん、あたしも、そう思った」

あの時の事は、いい思い出だ。心から嬉しいと感じたのも、本当だ。

「だから、隠す事は徹底的。それだから、まだアイツの家族の事も、殆ど知らないんだよ。父親と折り合いが悪くて、中学時代から家出ばかりしていたのは知ってるけど。その喧嘩の原因も聞いたこと無い。家を飛び出した理由だって、詳しい事は知らない」

「そろそろ、知り合って何年？」

「そろそろ、十年近くなるのかな？」

「それは、中々、堂が往ってるわね」

「そう思う。だから、ヘンなんだよ。最近のアイツ」

「浮気、とか？」

「……それは、感じないな。それよりも何か、あたしの事について思っている事が、あるのかも知れない」

話しながら、最近の不安も、ついでに聞いてもらった。

「それについては、倉真君が何も言い出さない限り、どうにもしようが無さそうね」

「だよ。で、笹原先生の問題もあって、流石に疲れ始めた」

「その話だけだ。あの人、今までにも、お見合いの話や、恋人が

居た事は勿論あるんだけど。何故か、相手が結婚を本格的に言い出した途端、振っちゃってるのよ。で、ナースの間では、高嶺の花と化してしまった」

その情報については、利知未は納得だ。自分の将来にプラスにならない相手なら、始めから結婚するつもりなど、持ち合わせていなかったのだろう。

「それが、どうして最近、医者になったばかりの瀬川先生に、アタックし始めているのか？ ちょっと、嫌なこと言ってる子も居るのよね」

「……何と無く、判る気がする。あたしから彼を誘っているのではないか？ とかじゃないのかな」

「当り。事は、もっと深刻。……身体の関係、先行してるんじゃないか、とか」

そんな目で、見られ始めているのかと思う。

以前から仲の良いナース以外の目が、キツイ感じに見え始めていたのは、どうやら気の所為ではなかったらしい。

「つまり、あたしから彼を誘って、……狙ってるって事？」

「そう言うことかしら？ だから、私はイライラするのよ」

「……避妊薬の話に、尾ひれが付いたかもね」

「それも実際、あると思うわ。あなたがインターン時代から処方して貰ってるって話が、何処からとも無く、噂話として流れ始めちゃった見たいなのよね」

「つまり、実習医時代から、あたしは彼を狙っていて、身体の関係も有るのでは無いか？ と言う事か」

「噂は噂として、それを広めているのが他にもない、彼の態度による物なのだから。やっぱり、そこを何とかするのが、先決な気もするのよね」

「バカバカしい。大体、いい大人が身体の関係持ったからって、結婚へ直結すると考えるのは、早計だよ」

「でも、今までアプローチし続けても、見向きもして貰えなかった

子達からすると、その事自体がヘンな嫉妬的になっても、不思議じゃないのは確かよね」

「言っておくけど、そんな事実は、全く無いよ」

「判ってるわよ。利知未さんが、一人の人を想い始めたらかなり一途だつて事も、貴女が面白半分にも男を誘うタイプじゃないって事も」

「……だよな」

香には、倉真と同棲を始める前から、恋愛の悩みを聞き続けて来て貰っている。判り切っている事だ。

「で、解決策何だけど」

「何か、いい案でもあるの？」

「貴女が、婚約までしている恋人が居るとしたら、噂を流している子達も、笹原先生も、何とか出来ないかしら？」

「そんな、簡単に行くかな」

「噂の面は、そこから誤解である事を流し直すことも可能よね」

「笹原先生は？」

「それ、いつたい、いつからそんな大変な状況に陥っちゃったの？」

「……先月の、中頃から」

利知未は、あの夜の事を、始めて人に話した。

話を聞いて、香も今までの彼の事を納得した。

「随分、目を掛けられてる物ね。でも、確かに、今年の研修医の中では、一番の注目株みたいよ？ 貴女は」

「その元は？」

「初オペが早かった事と、その後の、塚田先生の処置。それと、それ以降の、オペの経験数。任されてる患者の数」

「まだ、二十人居ないよ？」

「研修医、二カ月半でしょう？ かなり、大事に育てられてると思っわよ」

「……そうなのか」

まだ、執刀は4、5回という所だ。その他に先輩医師から預かっている患者を含めて、3月からここまでで、十六、七人という所だろうか。無事、退院までの運びとなったのは、初めから自分が担当している患者では、四人。

後は、退院までの様子を見させて貰った、十人。その十人は、一人で診ていた訳ではない。先輩から支持を受けて、勉強をさせて貰っただけだ。

どれも、それ程、大変な症例という事は無かった。

「けど、どっち道、早計過ぎるのは変わらないよな。あたしの何を見て、そう言うつもりに成ったんだ……？」

「つい、ぼやいてしまう。香が言った。」

「光源氏計画？」

「じゃ、笹原先生が光源氏で、あたしが紫の上って事になるのか？」

「利知未さん、読んだことあった？」

「高校時代に、少し読まされた」

「学校で？」

「そんな所。って、それは置いて。取り敢えず、恋人が居る事は言ってるんだから、知っているんだけどな」

「それくらいじゃ、効き目無いでしょう？」

「みただけ。だからって、倉真の事、そう言う相手だって言うのも……」

「プロポーズは、されてないんだ」

「まだ、やっとと大学、卒業したばかりだし。……その気、あるのかな？」

「現状が、どうだって言うのは、この際、無視。その事、突っ込まれたんでしょう？ 送別会の夜に」

「……そうだけど」

「じゃ、取り敢えず、やってみましょうよ。小道具は、私が用意

してあげる」

「小道具？」

「エンゲージリングくらい在った方が、信憑性あると思うわよ」

「貸してくれるの？」

「丁度良さそうなの、あったと思うのよね。利知未さん、サイズいくつ？」

「右の薬指は、9号か10号で入るんだけど。左は、買ったことない」

「じゃ、これ、試してみて」

そう言つて、自分の右の薬指から、リングを抜いて、利知未へ渡した。

「これは？」

「8号。丁度、薬指サイズみたいね。じゃ、病院にして来た事の無い指輪、月曜に持って来るわよ。病院で受け渡すのは、危ないか」

「遅出だから、香さんの昼休みに合わせて、何時もの店に行こうか？」

「そうしましょう」

指輪を返して、もう暫く相談をした。

「早めに蹴りつけた方が、良さそうね」

「…来週、誘われてる」

「どーしても駄目なら、やっぱり投げ飛ばしちゃうなさいよ」

二人の酒は、焼酎の水割りに変わっていた。香は、グラスの2/3ほど残っていた酒を、くいつと飲み干す。

「過激だね」

「そう？ あんな女つたらし、それ位で丁度良いと思うわよ」

その言葉と雰囲気、昔、何かあったのかも知れないと、何と無く思った。

明日は、早めに出掛ける予定だ。時間を見て、十時には店を出

た。

利知未からの電話の後、倉真は七時半まで残業をした。それから偶に行くラーメン屋で、何時も通りの夕飯を済ませた。

店を出てバイクに跨って、気持ちが悪くなる。

卓也のバイクは修理を終えて、今週頭に引き取られていた。

『……あの話は』 本当に、本当の話なのか？

あれから、卓也が利知未と笹原を見かけた日を聞いて、倉真は、どきりとした。

『あの日は。……利知未が、送別会で遅くなった日だ』

その一週間前、何時も以上に積極的な利知未の様子に、少し驚いた夜。

卓也が目撃したと言う、送別会の夜の利知未は、沈み込みがちだった。心配になり翌日、少し無理矢理、利知未を連れ出した。

『アン時は、元気を取り戻したよな。次の日だ。あの話を聞いたのは』

それから十日間。倉真は何度か利知未に、あの夜の事を聞いてみようかと考えた。……けれど、どうしても聞き切れなかった。

『疑ってるって訳じゃ、無いつもりなんだけどな』

それでも、不安はある。

ここ数ヶ月、利知未の様子が以前に比べて格段に女っぽく、可愛らしくなって来た。それは、自分の事を愛していると、改めて言われたあの時。

利知未をタンデムシートへ乗せて、海の公園へ出掛けた、今年の三月。

翌日から利知未が、研修医として働き始めると言う十二日の言葉。

「あれが、今の利知未の様子に繋がる、出来事、だよな……？」
そう思う気持ちもある。同時に、もしかしたら、自分よりも別に好い男が出来た所為かも知れないと、疑う気持ちも膨れ始めた。

今、倉真は、あの三月に出掛けたコースを、無意識に辿っていた。
利知未の帰宅は十時半頃だった。その頃、倉真はまだ、海の公園に居る。

利知未が夜勤で、昼間眠っている時。倉真の行動パターンは大體、決まっている。外でバイクの整備に興じているか、バイクを走らせて、近場を走らせているかだ。その場合は利知未が起きて見ると、まだ倉真は戻って居ない事も偶にはあった。

今夜、倉真がまだ帰宅していない事を知り、少しだけ不安を感じたが、何時もの事だと言えないことも無いかも知れない。

余り深く考えるのは止めた。今朝も早くに起きていた。眠さも感じている。利知未はシャワーを浴びて、取り敢えず寝室へ引っ込んだ。

眠い筈なのに、眠れなくて、何度か寝返りを打った。

利知未が、眠れない夜を過ごしている時間。倉真は気持ちを落ち着けて、改めて帰路についていた。

夜の海を眺めて、あの日を思い出し、利知未の事を、信じようと決めた。

それでも一度沸き起こった疑惑は、中々、消える物ではない。まだ、複雑な思いも残っている。その部分を、心の隅へ押し込めた。

明日は、休みだ。 利知未と二人、思い出の石廊崎まで、出掛ける約束だ。

十二時を回る頃、漸く倉真が帰宅した。眠れないで居た利知未は、玄関の物音を聞いて、ベッドを抜け出した。

三

利知未は、倉真の帰宅を迎えて、キッチンへ出る。
「お帰り」

「悪い、起こしたか？」

「ううん、眠れなかったから。今日は、ごめんね」

「謝ることか？ 偶には、息抜きも必要だろ」

言いながら、冷蔵庫からビールを取り出して、立ったままブルトッブを引き上げた。そのまま、ごくごくと美味そうに咽を鳴らす。

「何処まで行ってたの？」

「海の公園」

「あつちまで行ってたんだ。 ご飯は？」

「途中で、食って行っただよ」

答えながら、ダイニングチェアを引き出して腰掛け、タバコを取り出して火を着けた。その様子は、何時もと変わらないようにも見える。

「あたしも、もう少し飲み直そうかな」

利知未が言いながら、棚の中からウイスキーを取り出した。 ロックを用意し、倉真にも声を掛ける。

「倉真も、こっち飲む？」

「ロックで」

「了解」

二人分のロツクを出す頃に、ビールは飲み切っていた。

「350ミリ缶とは言え、一気に行ったな」

利知未が、感心したように言う。乾き物も少し用意した。向かいに腰掛けて、グラスを軽く打ち合わせて乾杯をした。

「水と、大して変わらネーだろ」

「ま、倉真の肝臓じゃ、そうだろうね」

「人のこと、言えるか？」

「あたしも、言えないけど」

顔だけで、倉真が笑顔を見せる。……何かを、感じる。

『けど、倉真から言い出すまでは、何も言わない方が、イイよね…』

…？』

そう思う事にして、不安を無理矢理、押し込めた。

「先月の話し、覚えてるか？」

「先月？」

「バイク事故。酷く壊れてたバイクを、持ってきた客」

「そんな話、してたね」

「週頭に引き渡したよ。かなり掛かったな。中古一台買い直した方が、安いくらいだ」

「そこまで掛けて、直したい程のバイクだったんだ」

「ボディペイントが特殊でさ。結構、格好良かったぜ。」

彼女の手製ペイントなんだと。結構、格好良かったぜ。美大の

「それで、大切だったんだね」

「ああ。けど、ペイント部分もかなり剥げてたからな。」

「まあ、また彼女に描き直して貰うんだとか、言っていたな」

「成る程、そう言う愛着の持ち方も、ある訳だ」

「人それぞれって、事だな」

「だね」

「だね」

ここまで話して、また、最近の悪い癖が、頭を擡げる。

「……面白いヤツでさ、お前、やっぱ、その人の検査、してる見ただぞ」

「何か、言ってた？」

「外科の背の高い美人研修医、瀬川先生、って、名前まで覚えてた」
利知未が声を上げて笑う。照れ臭そうな表情だった。

「美人研修医と、言ってくれてたんだ」

「ああ。俺の彼女だって、言ってるのかと一瞬思った」

「言わなかったの？」

「言える訳……無いよな」

また、違う言葉が出て来たと、利知未は内心では思う。それでも気付かない振りをして、楽しそうに会話を続けた。

「そうか。 仕事中だもんね、言える訳、無いか」

「……そう言う事だ」

何かを思う雰囲気、残りのロックを煽り飲む。 利知未は一瞬、心配そうな表情になる。

「明日、早くに出るんだよな」

「八時半には、出たい所だね」

「ンじゃ、シャワー浴びて、寝るか」

「……うん。 着替え、出しとくよ」

「頼む。 アンマ、飲み過ぎんなよ？」

「判ってる。 あたしも、もう一杯飲んだら、寝るよ」

「そうしろよ」

グラスを流しに出して、倉真が浴室へ向かった。 それを見送り、利知未は着替えを準備しに、リビングへ入った。

『……倉真の世話、焼いてる時間が、幸せなんだけどな』

出来れば、一生。 ……彼の世話を焼きながら、彼の子供を育てて。

そうして生きていければ、どれだけ、幸せだろうと考える。

『笹原先生は、あたしのパートナーじゃ、無い』

確信として、そう感じる。 彼の世話を焼きたいとも、彼の子供が欲しいとも、思える訳も無い。 ましてや、同じ夢を見て行くのな

ら……。

『病院で申し上がる手伝いをするよりも、倉真の整備工場を、あたしも一緒に立ち上げて、育てて。……彼の城を守る夢を、倉真と見ていたい』

その為なら、医者も資金を稼ぐ手段として、利用する事だって出来ると思う。確かに利知未のもう一つの思い。一人でも多くの人を助けたいという考えも、利知未の夢だと言えるのかも知れない。それでも、今の一番の夢は、……最愛の人と、幸せな家庭を。

ただ、その思いは、倉真が利知未を必要としてくれていると言っ
て貰えなければ、ただの押し付けだ。それが重くなってしまふの
なら。

辛い、悲しい事だけだ。 倉真の夢の、邪魔には成りたくは無
い。……倉真。……貴方は、どう考えているの？』
着替えを、用意する手が止まる。

倉真の準備を終えて、再び、グラスに酒を注いだ。

倉真の、思い遣り深い所が好きだと思う。 感謝しているのかも
知れない。 自身の心が、解き解れるまで。 ……長い、長い年
月を、優しい瞳で見つめ続けてくれて来た、彼。

『あたしの、弱さ、寂しさ、悲しみ……。 それらの物を見つけ、
そっと取り出して、包み込んでくれた、あの温かさ……。 そして、
心の強さ……。』

倉真でなければ、きっと心底、信頼する事は、出来なかっただろ
う。 そう、感じている。

『だから、私は、倉真を愛している。 ……愛する事が出来る、唯
一の存在』

利知未は、倉真には甘えてばかりいると、思っている。そして倉真にも、時には女として、甘えて貰いたいと思っている。『女として。……そう感じられるのは、やっぱり、倉真だけ』それでも、不安はある。

『倉真は、あたしが男みたいにしていた頃からを見続けていて、多分、その中の女としての私を認めてくれた、数少ない存在。だから……』

こうして、彼の前で、どんどん女に成って行く自分の事は、嫌いになって、しまわないだろうか……？

『以前のあたしには、思いも寄らなかつた、不安……』心が、グズグズに溶けてしまいそうになる。

利知未の目から、涙が零れ落ちた。

「……イヤだな。こんな顔、倉真には、見せられないよ……」涙を、手の甲で拭いながら、呟いていた。

シャワーを終え、脱衣所からキッチンへ出た倉真は、利知未の涙を見つけてしまった。

「利知未、どうした？ ……泣いているのか？」

その、涙を慌てて拭っている右手を、自分の左手で包み込んだ。右手で利知未の右手のグラスを掴み上げ、そつとテーブルへ置いた。

正面から肩を優しく抱く様にしながら、利知未を立ち上がらせて抱しめた。

「……何か、あったのか？」

「……何でも、ないよ。本当に、何でもないの」

「……貴方の事を想って、涙が零れ落ちたなんて、言えない。本当に？」

無言で、頷いた。

「そうか」

倉真はそう呟いて、そのまま、利知未の涙を受け止めてくれた。涙を止めようと頑張っても、その涙は中々、止まってはくれなかった。

……自分に、戸惑った。

倉真を求めぬる気持ちだが、涙と同じで、止まらない。少しは、少なくなつて来てくれた涙をそのままに、唇を求めた。

倉真は応えた。優しくキスをして、再び抱きつく、その先の求めにも……。

ベッドで、倉真の存在を強く感じて、利知未の不安が、瞬間だけ消えた。

身体を離すと、また不安が襲つて来てしまった。

それでも利知未は、倉真の体温を感じて、波立つ心を抑え付け、束の間の眠りについた。

翌朝、早くに目を覚まして、朝食の準備を整えた。

利知未自身は、食欲がある訳も無い。それでも倉真の腹は鳴っている筈だ。朝から三杯飯を腹に収める倉真である。

準備を整えてから顔を洗い、気分を変えて倉真を起こした。

その日、予定通り出掛けた思い出の灯台で、肩を寄せ合い、静かな時を過ごした。

この前、ここへきた日は。まだ、二人の関係は、微妙だった。愛するという気持ちにも、初心は、あるのかも知れない。

あの時の利知未の仕草。 今日の、利知未の仕草。
あの時の、利知未の表情。 今日の、利知未の表情。

二人を包んでいる、雰囲気の違い。

それは、何より雄弁に、今の倉真の思いをも、語っている。

あの頃よりも、二人は大人になった。 利知未は、女らしく、また、綺麗になっっている。

倉真は遅しく、その強さにも磨きが掛かり、いい男らしさも備えて来た。

心の中は、お互いの小さな疑惑と、倉真の誤解に、複雑な様相を見せている。

……それでも、初夏を迎える海は、さわやかな色彩と、涼やかな波の音を響かせている。

「海は、いいね。 ……大きくて、自分の悩みも、どんどん小さくなって行くみたいだよ」

頭を、倉真の肩へ凭れさせて、利知未が呟いた。

利知未の悩み。

それが何なのか、倉真には見えない。 昨夜の利知未の涙を、それを流させてしまった出来事が、自分に関する事だとは、思いも寄っていないかった。

「……そうだな」

短い倉真の返事を聞いて、利知未の心は、また少し、不安に捕らわれた。

四

翌日、日曜日は、何時もの二人の休日だった。
倉真は朝から、バイクを弄り始めてしまった。

『……俺も、駄目なヤツだな』

利知未を信じようと、決めた筈だった。
けれど、昨日のツーリングは、以前、同じ所へ出掛けた日に比べて、何と無く寂しい印象だけが、残ってしまったている。

二人、肩を寄せ合い、海を眺めながら、会話は余り無かった。

自分の情けなさを、痛感した。 気分がクサクサして、バイクに没頭して、忘れる事にした。

仕事中や、こうしてバイクを弄っている時には、利知未の事も、思い出さないうで居られる。 仕事後、ふと気が抜けた瞬間に、また、考えてしまう。

一昨日も、そうだった。 それで、海の公園まで、バイクを走らせた。

嫌な思いを打ち消すように、一日、バイク整備へ没頭していた。

利知未は、倉真と遅めの朝食を取り、家事をこなしていた。

『……倉真の気持ちも、気になるけど』 それよりも、笹原だ。

借りに、倉真に結婚の意志がなかったとしても、だからと言って、笹原を愛する事は出来ないだろうと思う。

倉真との関係。 一緒に過ごしてきた年月。 彼の深い思い遣りと、優しさ。

……何よりも、心の反応。

今の利知未にとって、倉真以上の存在は、在り得ない。唯一、
対抗できる相手は、心の中にだけ生きる、兄・裕一かもしれない。

『笹原先生とは、あたしが休みの日の、昼間に会う事にしよう』

夜は、危険だ。例え、食事に誘われても、この状況で、この
こ出掛けて行く事は出来ない。と言うよりは、したくない。

先ずは、一つ一つ、解決して行くことと思う。

翌日、月曜。

朝、倉真を送り出して、夕飯の準備を整えた。冷蔵庫へ入れて、
帰宅して、電子レンジを活用する。利知未の遅出の時は、何時も
そうしていた。

何時もよりも、一時間早くアパートを出て、香と約束の店へ向か
った。指輪を受け取り、一緒に昼食を済ませた。

夜、夜勤で出勤してきた笹原と、今週の約束をした。笹原から、
声を掛けて来た。

「瀬川さんは、二十五、二十六日が、休みだね」

「そうですね」

「食事の約束を、取り付けて置きたいと思ったんだが。最近の君
は、当日の誘いは受けてくれないからな」

やや、皮肉めいた言葉ではある。倉真と同棲を始める前、イン
ターン一年の頃には、当日の誘いでも、比較的、簡単に取れていた
事を言っているのだろうと感じる。

「笹原先生は、通常出勤になっていますね。……昼食では、いけ

「ませんか？」

「君から、日時を指定してもらえとは思えなかったよ。この前の返事を、聞かせて貰いたいだけだ。君の都合に合わせてよう」

「では、二十五日、よろしいですか？」

頷く笹原に、店を指定して、挨拶をして帰宅した。

香から借りた指輪は、まだ見せては居ない。

その週、倉真の帰宅は遅かった。利知未も遅出だ。早く帰宅しても意味が無い。……それに、今は。

出来るだけ、余計なことに心を囚われる時間を、減らそうと努力している。仕事は、好きな仕事だ。一生の生業にする信念で、取り組んでいる事だ。

そこに意識を集中して、今まで以上に、仕事へ励む。そうしている内に、時間が解決してくれる部分も、あるかも知れない。

社長は、来年三月で、倉真が入社して、二年になる事を思い出した。

『そろそろ、頃合か？』

来年、まずは自動車整備士資格・三級に、挑戦させて見ようと考え始めた。約一年の時間があれば、少しは勉強を進める事も、出来るだろうと考える。

休憩時間、倉真に声を掛けた。

「館川、そろそろ、勉強始めて置けよ」

「勉強？」

「整備士資格の勉強以外に、何があるんだ」

「受けさせて、貰えるっすか？」

「これからの、お前の勉強具合によるな」

「判りました！ 有難うございます」
それなら、そこに集中する力に、精神力を注ぎ込むことが出来る。
渡りに船だ。 良いタイミングかも知れない。

早速、遅くまでやっている本屋に立ち寄り、テキストを購入して
帰宅した。

利知未は今月に入ってから、毎週水曜日の午後だけ、外来を担当
していた。 それに伴い、自分の担当患者も、増え始めた。

塚田医師に相談しながら、症例によっては、笹原や藤澤の担当日
に回して、塚田に任せ切る程の難しい患者以外は、相談しながら、
治療、処置を進める。 これからが、本格的な勉強と言えるかもし
れない。

他科からオペの必要によって外科へ回される患者は、利知未へは
基本的に、殆ど回って来ない。 その中でも軽い者だけは、担当に
組み込まれるが、その場合、オペ後、症状が落ち着けば、元々の担
当科へ治療が戻る。

暫らくは、この状態が続いて行くのだろうと思った。

水曜の仕事を終え、医局で、翌日の笹原との約束に、軽く溜息を
付いた。

『……騙す事に、なるんだよな』

その後も笹原とは同じ病院の同じ科で、仕事仲間として付き合っ
て行くことに成る。 何かの拍子に、ばれないとも限らない。

『あたしの人生、嘘や誤魔化しばかりだ……』

……FOX時代から、ずっと。

お陰さまで、人を欺く為の度胸は、身に付いて来たかも知れない。

『あんまり、イイ事じゃないのは、確かだけど』
そう思つて、また、溜息だ。 ゆっくりと業務を終え、医局を出た。

倉真は週頭から、夜、勉強時間を取るようになった。

毎日、遅くても七時半には帰宅し、利知未が用意してくれていた飯を食い、九時頃から先に、シャワーを済ませる。今週に入ってから、のんびり湯船に浸かっていた試しは無い。

遅出の利知未が帰宅する頃には、テキストを開いていた。

とは言え、元々、教科書の類とは相性が悪い。 つい、ウトウトと居眠りをしてしまう。 はたと目を覚まして、少し涎が付いてしまっているテキストに、再び目を落とす。

利知未の働く病院は、夜勤で勤務に入る時間が九時だ。 一時間ほど遅出の医師と、顔を合わせる。 預かり患者の症状などは、その一時間で交換する。

遅出の就業時間は、一応、十時になる。 必ず時間通りに帰宅できる保障も無い。 何か突発的な事が起これば、その時間に業務を終了する事は、出来なくなってしまう。

今夜も十一時過ぎに帰宅した利知未は、テキストに涎を垂らして、居眠りする倉真を、リビングに見つけた。

『……寝ちゃってる』

荷物を足元に置いて、一人掛けのソファに腰掛けて、テーブルに頬杖を突き、暫く倉真の寝顔を眺めてしまう。

『子供みたいな顔、してる』 つい、小さく笑みが漏れる。

ソファから下りて、床に腰を下ろして、頭をテーブルに置いた手の上に乗せ直して、静かに見つめていた。

『……どうして、倉真だったんだろう……？』

これほど愛する事が出来た相手が、昔はどうしようもなかった、不良少年だった事を思い返す。

『……あの頃は、本当に、思っても見なかった』

FOXの、少年ボーカリスト・セガワとして知り合って、十年。

あの、苦しかった日々も、あの頃、初めての恋人を得た、幸せな気持ちも。

『敬太とは、全然、似てないよな』

けれど、優しさは同じかも知れない。ただ、その出し方が、二人は全然、違っている。

柔らかい綿花で、何時もそっと包み込んでくれていた様な、敬太の優しさ。その眼差しだけで、感じる事が出来ていた。

空気のように、自分の周りに何時も必ず在ってくれる。けれど、目には見えない倉真の優しさ。

100mを全力疾走して、酸素を求めた時に、始めて感じる有り難さ。

……普段は、そこにあるのが、当たり前過ぎて。

利知未の視線を感じて、倉真が目覚めます。

『……あ？ ああ、お疲れ』

『ただいま。テキスト、涎だらけに成ってる』

『ヤベ、また、やっちゃまった』

手の甲で、涎を拭く。その仕草に、利知未が小さく笑う。

『勉強、少しは進んだの？』

『進むと思うか？ ……どうも、文字つてのは駄目だな』

『けど、それやら無いと、駄目なんですよ？』

『そうなんだけどな。結構、覚えることが多いよ。社長は、良

「く見てるよ」

「来年の試験の為に、倉真にどれくらい勉強時間が必要か、考えてくれてたって事だね。頑張って」

「おお。飯、冷蔵庫だ」

「うん。倉真、晩酌はまだしない？」

「もうチヨイ、やってからな」

「眠っちゃわないでね。ご飯食べて、お風呂入っちゃおうよ」

「のんびり浸って来いよ」

「そーする」

荷物を何時もの場所へ片付けて、キッチンへ出て行った。

湯船に浸かって、色々な事を思っていた。

明日の会見に挑むための、心の準備が必要だ。

『……けど、兎に角』 笹原の事は、これで蹴りを着けてしまわないとならない。心が、そろそろ悲鳴を上げ始めている。

『……上手く、いきます様に』

今だけ、神の存在を、信じていたいと思った。

翌日、笹原の昼休みに合わせて、病院から、本の少しだけ遠い店へ入る。

食事だけは、付き合った。笹原の昼休み時間もある。食後の

珈琲を飲みながら、利知未から言い出した。

「あのお話ですが……」

指輪は、左手の薬指に、既に嵌めてある。それを、そっと右手で撫でる。

「……余り、いい返事は、聞け無さそうだね」

利知未の左手には、注目していた。それでも、何気ない様子を見せる。

「はい。 …お申し出は、やはり、お受けできません」

「どうしても、駄目だろうか？」

「彼が、プロポーズしてくれました」

チラリと、偽のエンゲージリングを、笹原に見せた。

「……そうか。 失敗したな。 もう少し前に、僕から渡して置けば良かったよ」

「申し訳、ありません」

余計な言葉は、言わない方がいい。 嘘は、言葉を重ねる度に、
真実の姿を曝け出すモノだ。

「……出会うのが、遅過ぎたようだ。 仕方が無い。 ……何時から、付き合っていたんだい？」

「一昨年、実習医として、病院に、お世話になる前には」

「飛んだ、独り相撲だった訳だね。 それでも直ぐには、君を諦めるのは難しいかもしれないな」

笹原は、珈琲に口をつけて、溜息をついた。

「僕を振ったのは、君が始めてだな……。 僕の気が変わらない内に、君がフリーになる様な事があれば、その時は遠慮しないでアタックさせて貰うよ」

心の中で、謝っていた。 ……それでも、倉真以外の人は、愛せない。

「そんな心配は無いと思いますが……。 心に、留めておきましょう」

「また、仕事では宜しく頼むよ」

「こちらこそ、ご指導、お願い致します」

キツチリと頭を下げる利知未を、少し恨めしい気分で、見詰めてしまった。

「……失礼するよ」

腕時計を見て、呟いた。 伝票を持って、先に席を立って行った。

笹原の姿が見えなくなるまで、利知未は静かに、珈琲を飲んで
た。

彼の姿が消えてから、そっと、指輪を外した。

『……本物の、エンゲージリング、欲しいな』

倉真からの。……それが今の、利知未の気持ちだ。

本音を言えば、物ではなくても構わない。ただ、言葉が欲しい
と思う。

もしも倉真が、先の結婚を匂わすような言葉を言ってくれたなら
……。

『……自分から、プロポーズしちゃうのに』

安堵と、新しい嘘を作り出してしまった事実、利知未は深い溜
息を漏らした。

指輪を箱に仕舞い、ゆつくりと珈琲を飲み干した。

タバコを出し、一本だけ吸ってから、店を重い足取りで後にした。

五

残り僅かな五月は、特に何事もなく、平穩に過ぎて行った。

倉真の態度は少しだけ、元に戻った。慣れない勉強に手を焼い
ている。それが気を逸らわすのに、役立つてくれている。

五月最後の利知未の休日は、三十日・火曜日だった。その前日、
夜勤明けの月曜日。その夜、倉真の勉強が終わるのを待って、晚
酌時間を取った。

「今日は、摘みも豪華だな」

「昼間、暇だったからね。色々、作ってみた」

「懐かしいな。バツカスで、お前が作った摘みが多い」

「あれも、もう二年以上前か。……私達も、それ位だね」

二人が、特別な存在に、なつてからの月日。

「始めの一年は、中々、会えなかったから」

「そうだったな」

「それでも、あの誕生日までは、我慢、出来てたんだよ」

「……俺は、正直、我慢するのも辛かったな」

飲みながら、あの頃からの思い出話を、二人で語り合った。

「……ごめんね」

「今更」

「そーだけど。……今は？」

「今は……」

ここ暫く忘れていた、あの疑惑が頭に掠めた。

「今は、こうして居られて、良かったと思ってるよ」

「……私も、一緒に住み始めて、良かったと思ってる」

倉真の雰囲気の変化を、敏感に察知した。

倉真が話を摩り替える前に、利知未は自分から、話を切り替えた。

「誕生日前の、五月。丁度、今頃だったかな？ 久し振りに、バツカスで倉真と会ったよね」

「そうだったな」

「あの時、宏治の手前、普通にしていたけど……。カウンターの

下で、倉真が手を握ってくれたでしょ？」

「そんな事も、あったな」

「……あの瞬間、凄く、幸せを感じたんだよ」

今、あの時の事を思い出して、どうなるものか？ 最近の少しの

擦れ違いが、埋まってくれるのだろうか……？

「宏治は、知らんぷりしてたよな」

「宏治は、知らんぷりしてたよな」

「して、くれてたんだよ。 宏治は、そう言うヤツ」
「だな」

利知未の、あのメンバー始めての弟分で、倉真の親友だ。 最近、その宏治にもお目に掛かっていない。

「今度、バツカス行こうか？」

「そうだな。 もうチョイ、俺の勉強癖が、ついてからにしてくれ」
「その方が、いいかもね」

倉真の言葉に、小さく笑う。 倉真は、本当に勉強、嫌いらしい。

「あの誕生日に倉真がくれた物、覚えてるよ。 それまで、色々な人達から貰ってきたプレゼントの中で、一番、嬉しかったプレゼント」
ト

「アン時は、見つけれなかったんだよな」

「CD。 …… 倉真に会いたくて、どうしようもない時には、良く聴いてた」

「そうだったのか」
「うん」

「あんな物で、そんなに喜んで貰えるとは、思わなかったよ」

「……数年分の想いが籠もった、最高のプレゼントだった。 ……あの夜の、倉真との時間も」

今日も身に着けていたネックレスを、無意識に弄る。

「…それも、俺からのプレゼントだな」

「そうだよ。 倉真から貰ったものは、どんな物でも、最高の贈り物。 モノでも、時間でも、言葉でも。 …… 倉真のお陰で、今、

私は頑張っでいられる」

利知未に、綺麗な笑顔で見つめられて、倉真の気持ちが疼いた。

『……疑う気持ちは、まだ、晴れてはくれない』 自分に、嫌気が差す。

それでも、ここ数ヶ月の利知未の変化は、倉真にそれ程の不安を

抱かせるのには、十分なモノだった。

利知未が、以前よりも女らしい雰囲気を見せてくれるようになった頃から、化粧らしき事も、始めている。それまで口紅も殆ど塗らなかつた女が、眉を整え、口紅を塗り、髪も綺麗に整え始めた変化は、不安を感じるには十分だと思う。

倉真を意識するようになってから、彼の前では、少しは身嗜みにも気を使うようになって来ていた。

そうなるまでは、異性としての倉真を思い始めた気持ちを隠していたのだから、それまでの男っぽい仕草や雰囲気、なるべく保ち続けようと努力もしていたのだ。

……心には逆らえなくて、その頃から、服装は変わっていた。

今夜の利知未も、ワンピース姿だ。化粧は流石にしていなかったが、髪を綺麗に整えて、仕草も、言葉も、飲み方も。今まで以上に、女らしい。

「あの誕生日から、私の溜息が、増えちゃったんだよね」
「溜息？」

利知未の声で、物思いから気が逸れた。

「そう。薬局の香さんと、お昼食べてて、言われちゃった事がある。私の悩みは、恋愛の事が殆どでしょうって」

小首を傾げて、倉真の表情を見る。……何か、考えてみたい。……倉真に会えない時間が、苦しくて、寂しくて、悲しかった頃。口を開きかけて、何も言わない倉真の様子に、悲しげに目を伏せた。

「あの頃、倉真と行ったツーリングにも、思い出が一杯あるよ。

小田原城で、キリン見つけたでしょう？ ビックリしたよね」

「そうだったな。象も居たな」

「ね。……男に間違えられて、オカシな目で見られた事も、一杯

あつた」

「観光客の反応は、笑えたよな」

「笑うしか、なかったよね。……少しは、ショックだったんだけど」

「そうだったのか？ 気にしてないかと思っていた」

少し意地悪におどけて、倉真が言った。軽く剥れて、利知未が返す。

「酷いな。……温泉で、牛乳の匂い、買ったばかりの手拭につけて来たよね」

倉真も、その時の事を思い出した。

そう言えば、自分の浮気を疑われ始めたのは、あの時からだったと、初の大喧嘩の翌朝、利知未が言っていた。

「あの兄弟、今頃、二人とも小学生だな」

「その前のデートは、横浜の観光地巡りか。あの女子大生も、すっかり、私のこと男だと思ってくれてたみたいだったよね」

「お前が、そう仕向けたんだろ？ あの時は」

「そうだった。……ホームシック、掛かってた頃だと思う」

「ホームシック？」

「下宿の賑やかさが、懐かしくなってしまった頃。倉真ともっと、豆に会う事が出来たら、少しは、癒されてたかも知れない」

「あの頃は、お前も忙しかったからな」

「うん。始めて病院で、実習医として働き始めた頃だったから。色々、悩みもあつたんだよ」

今思えば、あの頃から笹原は、自分を吟味していたらしい。

再び、軽く目を伏せた利知未の変化を、今度は倉真も気付いた。……その後のこと、覚えてるよ。……初めて、お前の部屋へ、上がった夜」

抱きながら、利知未が流していた、涙。

「…今日の服も、裕兄のお古だね」

「ああ。丁度いいよ。これ着てたら、勉強を助けてもらえるんじゃないかと、思ったんだよ。裕一さん、秀才だっただろう?」

倉真の言葉に、利知未が小さく笑ってくれた。

「弦担ぎって、事? そんな都合よく、行くかな」

「涎で、べとべとだな」

今日もテキストを開いたまま、少し居眠りをしてしまっていた。

「洗うしか、ないな。本番も、お古、着て行く?」

「それまでに、着潰しちまいそうだな」

「一着、避けて置こうか?」

利知未の冗談に、倉真も小さく、笑ってくれた。

「……やっと、笑ってくれた」

「お前もな」

少しだけ、二人の距離が戻って、それから、思い出話を続けた。

「その後で、私は始めて、倉真の作ったご飯を食べさせて貰ったよ」

「居酒屋メニューな」

「魚、焼けるんだって、実は内心、感心してた。酢の物も、樹絵

が作るよりも上手だったよね」

「あと、冷凍コーンの、バターコーンか」

「味噌汁もあったでしょう。倉真の実家は、これ位の味付けだったんだって、始めて知ったよ」

「……実家の事は、余り話して来なかったからな」

「……いいよ。その内、話したくなったら、色々、聞かせてね?」

「ああ」

「サラダ。私の好みに、合わせてくれたのになって、思った」

「お前、ベジタリアンもどき、だったんだよな。思い出して、慌

てて作り足したんだよ」

「あの夜は、遅くなっちゃったんだよね」

「そうだったな」

その次の約束が、果たされなくなるとは、あの時には思っても見なかった。

「次の約束が、果たせなくて、二ヶ月振りに会った時、……倉真、玄関で行き成り、抱しめてくれたでしょう？」

「……今、思い出すと、チヨイ恥ずかしいな」

「私は、嬉しかったよ」

その後の事も、思い出した。

「……まさか、あんな大喧嘩になるとは、思わなかったけど」

「あれが、ここへ越してくる、切っ掛けだったな」

「……うん。だから、…偶には、浮気して貰っても、イイのかも知れない」

呟いてから、付け足した。

「言葉だけだからね？ ……本当は、凄く、イヤだよ」

「……判ってる」 ……お前は、最近、どうなんだ？

出掛かった言葉を、喉で止めて、押し込んだ。

翌年、二年参りへ行った時の事。それから、部屋を探し始めた頃。

不動産の、気の良い青年との出会い。

越して来てからの、一年二ヶ月。

「今年、記念日に何もしなかったな」

利知未が思い出して、言い出した。

「記念日？ 何のだ」

「二人で住み始めた日の、記念日」

「四月三日か。 今年は、月曜だったな」

「来年は、ちゃんとやろうね？ 私の仕事が、夜勤明けか休みなら、いいんだけどな。 そうだったら、ご馳走、作ってあげるよ」

「来年の話か。 ……今から、楽しみにしておくよ」

答えながら、来年のその日、二人の関係が、どうなっているのか？
不安も覚えてしまった。

『……まただ。……倉真、最近、どうしたの？』

利知未も、不安を感じる。

「また、温泉にでも、泊りがけで行くことが出来ればいいな」

質問は、心の奥へ仕舞って、話を明るい方向へと、向け直した。

「そうだな」

今夜は、利知未から誘った。

「……ね、明日、早いよね？ もう、寝ようか」

十一時半を回っている。 飲む時は、一時頃まで飲んでいられる時もある。

早めに寝室へ引っ込んで。 倉真に抱かれて、少しだけ、不安を忘れた。

夜中、もう、明け方近い頃。

利知未はふと目を覚まして、隣の倉真の寝顔を見つめた。

身体の向きを変えて、うつ伏せになって、自分の腕の上へ頬を預けた。

『……やっぱり、倉真、昔の儘のあたしの方が、好いのかな……？』
最近の倉真。

勉強が大変で、態度は、前の倉真に戻って来てはいる。 その分、今夜のような、のんびりと酒を飲みながらゆつくりと話せる機会があると、隠れていたぎこちなさが、再び現れる。

倉真に嫌われないためなら、あの頃の自分に、戻る事も容易い。

……少しは、心の葛藤が、あるかも知れないけれど。

ただ、今の利知未も、飾っていたり、偽りの姿を見せているつもりは、全くない。 昔から、恋人の前での利知未は、こんな感じだ

った。

「……ちゃんと、受け止めてくれるって、言ってくれたよね……？」
少しだけ、悲しい気分になって、呟っていた。

「……倉真の気持ち、信じて居たいよ……」
じっと、彼の寝顔を、見つめていた。

倉真は、良く眠っている。何か、夢を見ているみたいだった。

「……利知未」

寝言を言つて、利知未の体温を、探している。

「……ここに、居るよ？」

囁いて、その手を、そっと握り締めた。

夢の中で倉真は、一寸先も良く見えないような、濃い霧の中。
利知未の姿を探して、彷徨っていた。

遠くで、別の誰かと囁き交わしている、声だけが聞こえてくる。

「どこにいる？ 利知未？ 利知未……！」

そう、叫んでいた彼女の名前が、寝言となって、現れていた。

温かいぬくもりを左手に感じて、その手を、確りと握り締めた。

夢の中の倉真は、その手を引き寄せて、利知未の身体を、強く抱
しめた。

「……何処にも、行くな。…この手を、離さないでくれ」

微かに頷く利知未の頭の動きを感じて、漸く、気持ちが落ち着い
た。

夢の中でなら、素直に言える、倉真の本音。
夢の外の利知未には、その声は聞こえない。

「……倉真。ずっと、傍に居てね……？」

囁く言葉は偶然にも、夢の中の彼の言葉に、答えていた。

二〇〇六年 九月七日(2008・4・5改定) 利知未シリーズ・番外1

研修医一年・三月から五月 貴方
のために 了

3 研修医一年・五月（後書き）

お付き合い、ありがとうございます。そしてお待たせ致しました。続きのタイトルは、「二人で見る未来」 近日中に、アップ予定です。

個人的に仕事が変わってしまったり、色々な変化がありまして、自分の休日に更新をしていければと思います……。早くに直して、出来れば週一くらいのペースで上げられればと思いますので、また宜しくお願い致します。

なお、文字数の関係で、連載扱いでの投稿となってしまうので、後4作品も、この様な投稿形態となるかと思えますので、中篇くらいのつもりでご覧いただければ、幸いです。それでは、また。>

（ ） <

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0251e/>

貴方のために (利知未シリーズ 番外1)

2009年3月24日08時49分発行